特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第４集

西都原（さいとばる）１７１号墳

（第１分冊）

平成15年3月

宮崎県教育委員会

特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第４集

西都原（さいとばる）１７１号墳

（第１分冊）

平成 15 年 3 月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、平成７年度から、文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」による助成を得て、西都原古墳群の新たな整備を進めております。

171号墳については、平成10年度から12年度にかけて発掘調査を行い、整備の基礎となる貴重な資料を得ることができました。本書は、同調査によって得られた様々な成果について報告するものです。

この報告書が、学術研究においてはもちろん、学校教育や生涯学習の場においても活用され、遺跡や文化財に関する理解を深める一助となることを期待いたします。

本事業を進めるにあたり、御理解・御協力を賜った地元住民の方々をはじめ、指導委員会の先生方や各関係の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成15年３月

宮崎県教育委員会

例　言

1　本書は、文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」による助成を得て、平成10年度から平成12年度にかけて発掘調査を実施した西都原171号墳の発掘調査報告書の第１分冊である。本書では、大正時代の調査概要と墳丘及び周溝について報告し、遺物等については第２分冊で報告する予定である。なお、墳丘整備についても別途報告予定である。

2　発掘調査は宮崎県教育委員会文化課が行い、整理作業については宮崎県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

3　現地調査における図面作成は、松林豊樹、高橋誠、大原一彦、小守容子が主に行い、一部㈲ジパングサーベイに委託した。

4　墳丘の葺石測量及び周辺地形測量は、㈱村上測量に委託した。

5　現地調査における写真撮影は、松林豊樹、高橋誠、東憲章が行い、空中写真撮影は、㈱スカイ・サーベイ、㈱九州航空に委託した。

6　本書に使用した図面の製図は、松林豊樹が行った。

7　本書に使用した写真の一部は、京都大学考古学研究室の御厚意により掲載した。

8　本書の執筆は松林豊樹が行った。

9　調査に伴って作成した図面・写真等の記録類は、宮崎県文化課及び宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土した遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管し、現在整理中である。

本　文　目　次

第Ⅰ章 はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査組織 …… 1
第３節　調査の概要 …… 3
第Ⅱ章 西都原古墳群の概要
第１節　日向地方の古墳分布状況 …… 6
第２節　宮崎平野部の古墳分布状況 …… 8
第３節　西都原古墳群の概要 …… 11
第Ⅲ章 大正年間の調査
第１節　大正年間の西都原古墳群調査概要 …… 21
第２節　171号（旧112号）墳の調査 …… 21
第Ⅳ章 墳丘と周溝
第１節　墳丘の形状 …… 30
第２節　葺石 …… 39
第３節　周溝 …… 40

－以下第２分冊－

挿　図　目　次

第 1 図　西都原171号墳墳丘測量図（1／400）…… 4
第 2 図　調査区配置図（1／1,000）…… 5
第 3 図　日向地方の主要古墳分布地域と前方後円墳分布図 …… 7
第 4 図　宮崎平野部古墳群分布図 …… 9
第 5 図　西都原古墳群全体図（1／20,000）…… 12
第 6 図　A～E・M・N群（1／5,000）…… 13～14
第 7 図　F・G群（1／5,000）…… 16
第 8 図　H・I群（1／5,000）…… 17
第 9 図　I・J・K群（1／5,000）…… 18
第10図　L群（1／5,000）…… 19
第11図　資料２に伴う挿図 …… 26
第12図　資料５に伴う挿図① …… 29
第13図　資料５に伴う挿図② …… 29
第14図　墳丘及び周溝検出状況（1／200）…… 31～32
第15図　墳丘断面図①（上段：O－SE，下段：O－SW）（1／50）…… 33～34
第16図　墳丘断面図②（上段：O－NW，下段：O－NE）（1／50）…… 35～36
第17図　葺石検出状況（1／100）…… 37～38

表　目　次

第１表　宮崎平野部の主要古墳群古墳構成 …… 10
第２表　西都原古墳群における各小群の古墳構成 …… 20
第３表　大正年間調査古墳一覧 …… 22
第４表　大正調査における墳頂部及び基底部付近の各辺の埴輪列長、埴輪個数 …… 23

図　版　目　次

図版 1　①：大正時代発掘調査着手以前の 171 号墳（南から？） …… 43
②：大正時代発掘調査着手以前の 171 号墳（東から？） …… 43
図版 2　①：大正調査における墳丘南東面１段目テラス？埴輪列検出状況（南から？） …… 44
②：大正調査における墳丘北東面１段目テラス？埴輪列検出状況（東から？） …… 44
図版 3　①：大正調査における墳頂平坦面北コーナー付近？埴輪列検出状況（北東から？） …… 45
②：大正調査における墳頂平坦面北西側埴輪列検出状況（西から？） …… 45
図版 4　①：大正調査における墳頂平坦面家形埴輪基底部？検出状況（南から？） …… 46
②：調査区（平成 11 年度）遠景（南西上空から） …… 46
図版 5　①：171 号墳墳丘検出状況（上空から） …… 47
②：墳丘周辺調査区遠景（南上空から） …… 47
図版 6　①：墳丘検出状況近影（南から） …… 48
②：墳丘検出状況近影（北から） …… 48
図版 7　①：墳丘南西・南東面における葺石検出状況（南から） …… 49
②：墳丘南東面における葺石検出状況（南から） …… 49
図版 8　①：墳丘南東面における葺石検出状況（東コーナー方向から） …… 50
②：墳丘北東面における葺石検出状況（東コーナー方向から） …… 50
図版 9　①：墳丘北西面における葺石検出状況（北コーナー方向から） …… 51
②：墳丘南西側周溝検出状況（平成 11 年度・南から） …… 51
図版 10　①：墳丘南西側１段目西半部葺石検出状況（南西から） …… 52
②：墳丘北東側主軸付近２段目葺石検出状況（北から） …… 52
③：墳丘南西側周溝検出状況（西コーナー方向から） …… 52
④：墳丘南西側周溝検出状況（平成 11 年度・南コーナー方向から） …… 52
⑤：墳丘南西側１段目西半部主軸付近葺石検出状況近影（上から） …… 52
⑥：墳丘南西側周溝検出状況（南コーナー方向から） …… 52
⑦：墳丘南西側１段目西半部主軸付近葺石検出状況近影（南西から） …… 52
⑧：墳丘南コーナー付近周溝検出状況（西から） …… 52

付　図　　西都原古墳群　男狭穂塚・女狭穂塚周辺地形測量図

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

西都原古墳群は、宮崎県の中央部に位置する西都市大字三宅に在り、標高60m前後の洪積台地上を中心として分布する総数300基を超える大古墳群である。

本古墳群では、大正年間に我が国初の本格的な古墳発掘調査が実施され、日本考古学史上に残る大きな成果を上げている[1]。その後、昭和9（1934）年には国の史跡、昭和27（1952）年には特別史跡として指定され、昭和44（1969）年から全国に先駆けた「風土記の丘」整備事業が行われた[2]。これらの整備によって、周辺景観に調和した秀麗な史跡として高い評価を得てきた反面、大正年間の調査以降、数基の地下式横穴墓に関する調査しか行われていなかったことから、古墳群の歴史的な解明や理解、それに根差した文化的・教育的活用については、脆弱さが指摘されてきた。

宮崎県教育委員会では、こうした時代の要請に応じた西都原古墳群の在るべき姿を検討するため、平成5（1993）年に「西都原古墳群保存整備検討委員会」を設置した。2カ年にわたる検討結果は平成6（1994）年に『西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画』としてまとめられ、新たな史跡整備の実施に向けた準備を整えた。そして、平成7（1995）年度から国の補助事業「大規模遺跡等総合整備事業（古代ロマン再生事業）が新設されたことを受けて、西都原古墳群の保存整備事業に着手することとなった[3]。

同整備事業では整備計画等に基づき、整備対象となるいくつかの古墳について事前の発掘調査を実施している。これまでに調査を実施した古墳は、鬼の窟古墳、205号墳、13号墳、酒元ノ上横穴墓群、171号墳、169号墳、100号墳、173号墳、167号、168号、4号地下式横穴墓である[4]。また、陵墓参考地である男狭穂塚・女狭穂塚については、宮内庁の協力を得て、地方自治体としては初めての測量調査を実施した[5]ほか、平成16年度開館予定の県立西都原考古博物館建設地に所在する西都原東遺跡についても発掘調査を実施した。

ここに報告する171号墳については、平成10（1998）年度から同12年度にかけて墳丘及び周辺の整備に必要な情報を得ることを目的として調査を行い、平成12～13年度に整備を実施した。

第2節　調査組織

171号墳の発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、西都原古墳群保存整備指導委員会及び文化庁の指導のもとに実施した。なお、遺物等の整理作業については、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて行った。

発掘調査から報告書作成年度における調査組織は、以下のとおりである。

西都原古墳群保存整備指導委員会

委員長	日高正晴	西都原古墳研究所長	(平成10～14年度)
委員	大塚初重	明治大学名誉教授	(平成10～14年度)
	水野正好	奈良大学学長	(平成10～14年度)
	小田富士雄	福岡大学教授	(平成10～14年度)
	杉本正美	九州芸術工科大学教授	(平成10～14年度)
	柳沢一男	宮崎大学教授	(平成10～14年度)
顧問	斉藤忠	大正大学名誉教授	(平成10～14年度)

事務局（宮崎県教育委員会）

教育長	笹山竹義	(平成10～12年度)
	岩切正憲	(平成13～14年度)
教育次長	川崎浩康	(平成10年度)
	新垣隆正	(平成11年度)
	福永孝義	(平成12～13年度)
	沼田憲明	(平成14年度)
教育次長	岩切正憲	(平成10～12年度)
	川口靖文	(平成13～14年度)
文化課長	仲田俊彦	(平成10～11年度)
	黒岩正博	(平成12～13年度)
	園田実穂	(平成14年度)
課長補佐	矢野剛	(平成10～11年度)
	井上貴	(平成12～14年度)
主幹兼庶務係長	井上文弘	(平成10～11年度)
	長谷川勝海	(平成12～14年度)
予算編成担当	櫻木真治	(平成10年度)
	向井大蔵	(平成11～13年度)
	甲斐久志	(平成14年度)
予算執行担当	礒貝仁美	(平成10～12年度)
	山村伊智子	(平成13～14年度)
埋蔵文化財係長	北郷泰道	(平成10～11年度)
西都原対策班主幹	北郷泰道	(平成12～14年度)
整備担当	飯田博之	(平成10～11年度)
	重山郁子	(平成12～14年度)
	和田理啓	(平成13～14年度)
調査担当	松林豊樹	(平成10～11年度)
	高橋誠	(平成12年度)
整理・報告書担当	松林豊樹	(平成14年度)

調査協力

西都市教育委員会、新富町教育委員会、天理大学

第３節　調査の概要

171号墳の周辺は、今回の史跡整備事業による用地買収以前には造園業者が所有していたため、造園用の樹木が植栽されていたが、買収時に樹木が移転され、調査時点では丈の低い草が生い茂った状態となっていた。今回の調査は、これらの草刈りを行った後、平成10～12年度に及ぶ、都合３カ年に渡って実施した。以下、各年度ごとにその概要を述べる。

平成10年度

調査初年度となった平成10年度は墳丘測量から着手し、墳丘の検出作業を実施した。測定点追尾法により墳丘及び周辺地を測量した後、墳頂部のほぼ中央に中心点を定め、この中心点から墳丘の各辺に対して直交する軸を主軸として設定した。この主軸に沿うかたちで、北東・北西面は調査区境界付近まで、南東・南西面は墳丘外まで及ぶトレンチを設定し、墳丘面を確認していった。墳丘面の検出に際して、墳丘斜面には葺石がみられ、１段目テラスには円筒埴輪が出土したことから、その認定は比較的容易であった。各墳丘面に数本のベルトを残し、トレンチを拡張しながら墳丘検出を進めた。南西側の墳丘外へ続くトレンチでは周溝の存在が確認されたが、墳丘の１段目テラスから墳端にかけて大きく削平されていることがわかった。南東側のトレンチでは、１段目斜面の葺石直下にアカホヤ火山灰層前後の自然堆積層がみられたことから、墳丘の１段目は地山整形であると判断された。また、南東側の墳端では周溝は確認されなかった。このほか、墳頂平坦面の中央部には大正時代の調査痕跡が明瞭にみられ、その南東付近で器財埴輪片と同基底部が検出された。

平成11年度

平成11年度には前年度の作業を継続し、墳丘をほぼ全面的に検出した。墳頂片部及び１段目テラスにみられた円筒埴輪、器財埴輪基底部等はすべて取り上げた。大正時代の調査坑は完掘して精査したが、主体部等の痕跡はみられず、同調査で埋設された石碑が出土した。また、地権者のご厚意により北東主軸トレンチを女狭穂塚に廻るフェンス付近まで延長し、溝状遺構を確認した。この溝は、その延長上に設定したすべてのトレンチで検出され、女狭穂塚の周堤に沿って延びていることから、女狭穂塚の周溝であると考えられた。

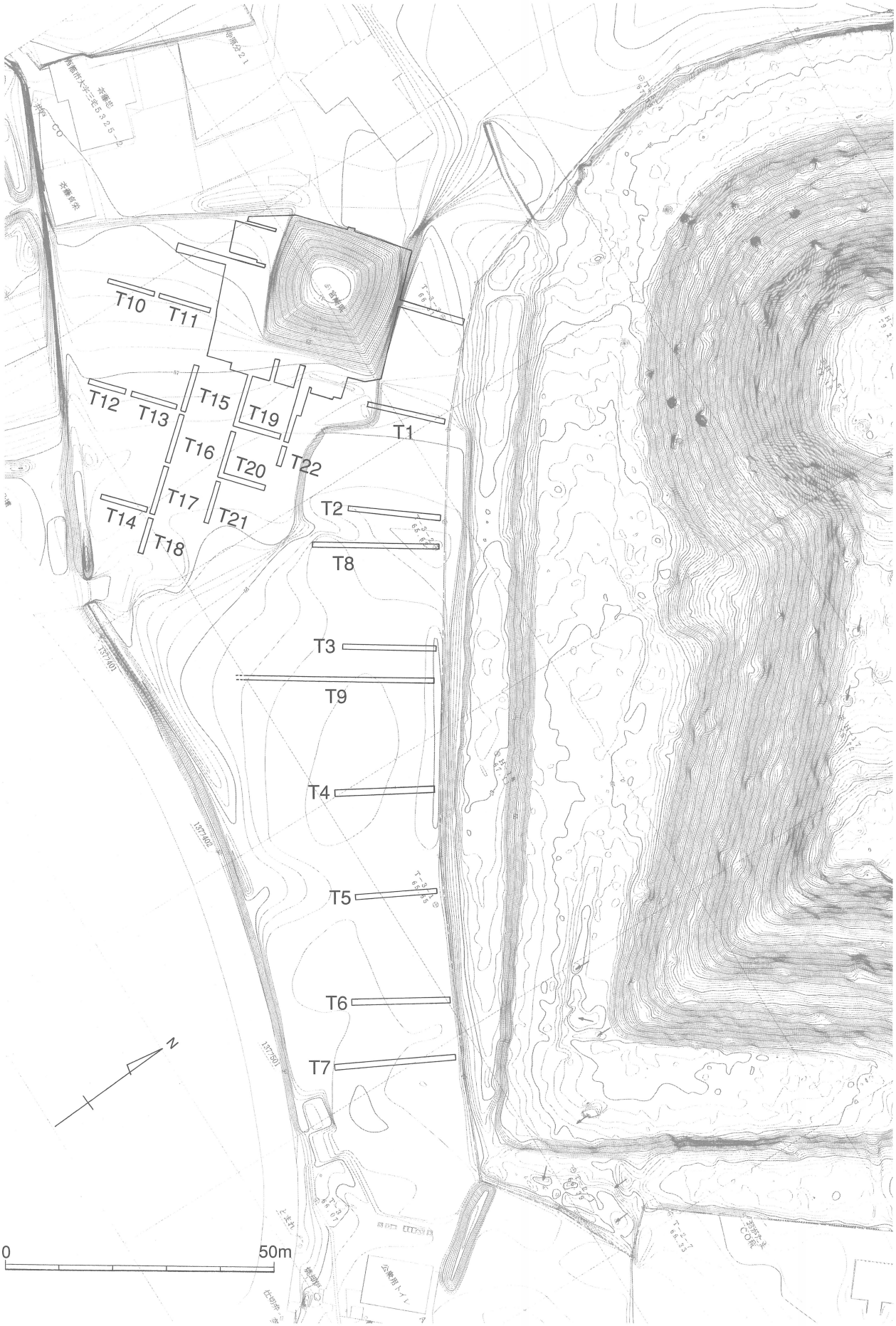
年度末には墳丘２段目の葺石を生かし、欠落部分を復元する整備工事を実施した。

平成12年度

平成12年度には南西側の墳端付近の調査区を西コーナーへ向かって拡張し、周溝の検出を進めたところ、周溝の墳丘側法面に葺石が確認された。また、古墳整備に伴う園路整備が予定されていた墳丘南側周辺に格子状のトレンチを設定して調査をおこなったが、遺構は確認されなかった。

整備工事は１段目の葺石及び墳丘復元を行い、13年度に周辺の公園整備を実施した。

第１図　西都原171号墳墳丘測量図（１／400）



第２図　調査区配置図（１／1,000）

第Ⅱ章　西都原古墳群の概要

第１節　日向地方の古墳分布

九州島の南東部に位置する宮崎県および鹿児島県東部の大隅半島を含む地域は、律令期の大隅国分国以前には、ともに日向国として捉えられていた。本地域では、前方後円墳や円墳などの高塚古墳のほか、横穴墓、組合式や刳抜式等の石棺、地下式横穴墓、地下式板石積石室といった古墳時代墓制が、大小河川流域に形成された平野や盆地毎に群在しており、その分布状況から、大きく以下の８地域に分けて捉えることができる[6]（第３図）。

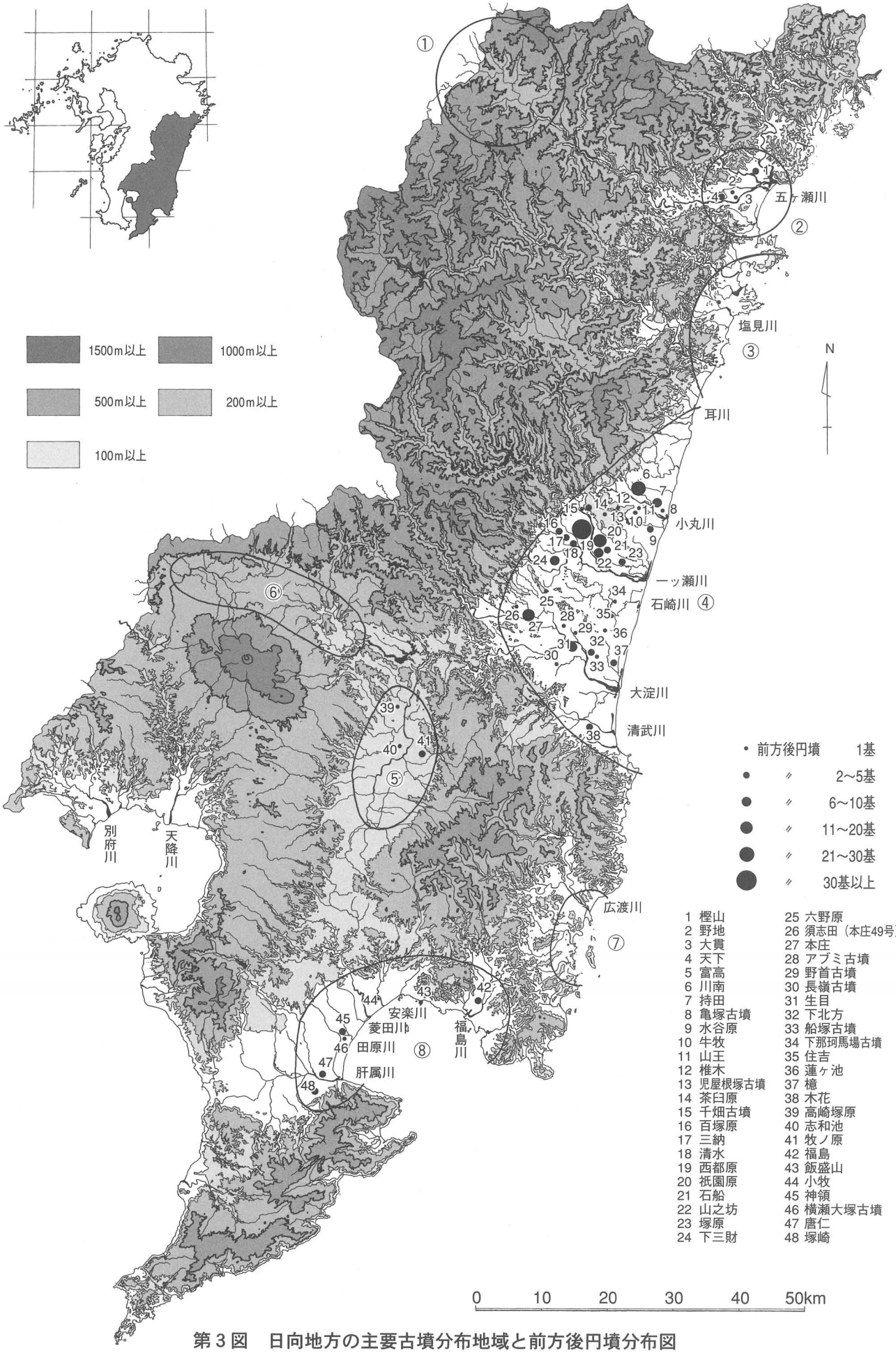
①五ヶ瀬川上流域を中心とする内陸部　（西臼杵地域）
②五ヶ瀬川・北川下流域を中心とする平野部　（延岡地域）
③塩見川下流域を中心とする平野部　（日向地域）
④小丸川、一ツ瀬川、大淀川下流域を含む広義の宮崎平野部（宮崎平野部地域）
⑤大淀川中流域の都城盆地周辺部　（都城地域）
⑥大淀川、川内川上流域を中心とする内陸部　（西諸県地域）
⑦広渡川下流域を中心とする平野部　（日南地域）
⑧志布志湾沿岸を中心とする地域　（志布志地域）

①の西臼杵地域には、少数の円墳、横穴墓136基、組合式石棺12基ほどが確認されている。円墳については、調査事例がないためその存在自体判然としないが、円墳であるとすれば主体部には組合式石棺が採用されている可能性が高いと考えられる。墓制としては横穴墓の分布が卓越する地域といえる。

②の延岡地域では、10基前後の前方後円墳を含む高塚古墳約60基と組合式石棺30基、刳抜式石棺10基、横穴墓15基が確認されているが、相対的には高塚古墳の分布が多いといえる。ただし、これまでに調査された円墳主体部には石棺が採用されているものが多いことから、その割合を単純に判断することはできない。主体部に石棺を採用する古墳が多いことは、①を含む五ヶ瀬川流域の地域的特色の１つといえる。

③の日向地域では、前方後円墳１基を含む高塚古墳29基、横穴墓７基が確認されており、全体的に古墳の分布数が少ない地域であるが、高塚古墳の分布が主体的な地域といえる。

④の宮崎平野部地域には、100基を超える前方後円墳を含む高塚古墳約1200基、550基を超える横穴墓、200基を超える地下式横穴墓が確認されている。分布する古墳数や前方後円墳の規模など、全ての面で他の７地域を圧倒している。本地域に所在する古墳群には大規模なものが多く、高塚古墳・地下式横穴墓・横穴墓が同一古墳群内に含まれるものもみられる。横穴墓については、その築造ピークが高塚古墳・地下式横穴墓よりも遅れることが指摘されている[7]ことから、高塚古墳と地下式横穴墓の併存状況を考えると、前者が主体的な地域といえよう。



第３図　日向地方の主要古墳分布地域と前方後円墳分布図

⑤の都城地域では、前方後円墳数基を含む高塚古墳約90基、100基を超える地下式横穴墓、４基の組合式石棺墓、１基の地下式板石積石室墓が確認されている。高塚古墳には小規模な円墳が多く、主体部に地下式横穴墓を採用している可能性があることから、高塚古墳よりも地下式横穴墓の分布がやや優勢な地域といえる。

⑥の西諸県地域では、数基の円墳、478基の地下式横穴墓、地下式板石積石室墓が確認されている。数基存在する円墳も主体部に地下式横穴が採用されている可能性が高く、地下式横穴墓が主体的に分布する地域といえる。なお、隣接する鹿児島県側の川内川流域や熊本県側の球磨川流域では、地下式横穴墓に対する地下式板石積石室墓の分布する割合が高くなる傾向がみられる。

⑦の日南地域では、少数の円墳、組合式石棺が確認されているのみで、③の日向地域と同様に古墳分布が少ない地域である。

⑧の志布志地域では、20基前後の前方後円墳を含む高塚古墳約200基以上、地下式横穴墓120基以上が確認されている。高塚古墳と地下式横穴墓が混在する古墳群が多く、宮崎平野部地域に類似した在り方を示すが、横穴墓は分布していない。

以上のように、８つの地域ではそれぞれ特徴的な古墳時代墓制の分布状況を示すが、高塚古墳の中でも畿内勢力との強い結びつきが予想される前方後円墳の分布に注目すると、②・③・④・⑤・⑧の５地域に約160基が分布している。その内の８割にあたる約120基が④の宮崎平野部地域に集中していることから、宮崎平野部地域は古墳時代における日向地方の政治的中心を担った地域であった可能性が高いと考えられる。

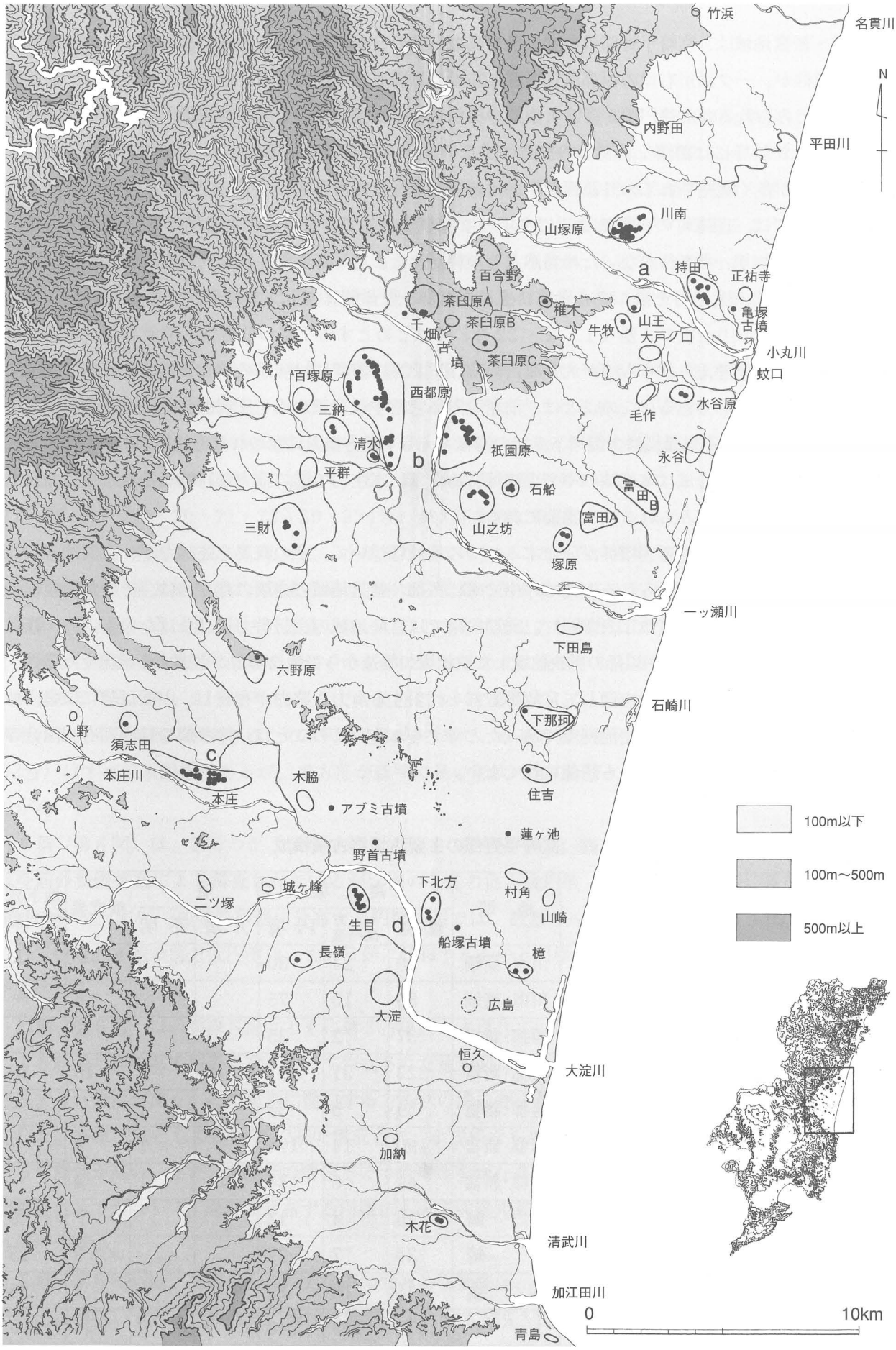
第２節　宮崎平野部の古墳分布

ここでいう宮崎平野部は、児湯郡都農町から東諸県郡綾町を結ぶ九州山地と、綾町から宮崎市青島を結ぶ南那珂山地の地形区分線及び東の日向灘に面する海岸線に囲まれた南北に長い三角形状に広がる地域である。この地域には、前節で述べたように日向地方全域に分布する前方後円墳の約８割が集中しているが、多数の前方後円墳を擁する主要古墳群は、平野部を東流する河川流域毎に大きく以下の４地域に分布が集中している（第４図）。

a　小丸川下流域を中心とする地域　　（高鍋・川南地域）
b　一ツ瀬川中・下流域を中心とする地域（西都・新富地域）
c　本庄川流域を中心とする地域　　（国富地域）
d　大淀川下流域を中心とする地域　　（宮崎地域）

以上の４地域に分布する主要古墳群の古墳構成は第１表のとおりで、ここに上げた古墳群だけで、宮崎平野部に分布する高塚古墳の70％以上を占める。

高鍋・川南地域では、小丸川下流域でもその左岸に大規模な古墳群がみられる。また、この地域では、従来地下式横穴墓の存在は確認されていなかったが、現在行われている東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、小丸川右岸の牛牧古墳群内で８基が確認されている[8]。



第４図　宮崎平野部の古墳群分布図

西都・新富地域は、宮崎平野部の中でも最も高塚古墳の分布が集中する地域である。この地域を代表する古墳群が、一ツ瀬川右岸の西都原古墳群と左岸の祇園原古墳群である。西都原古墳群には、前期段階の築造とみられる前方後円墳が多く、中期の男狭穂塚・女狭穂塚の登場で前方後円墳の築造はピークを迎え、それ以降には顕著な首長墓の築造は少ない。一方、祇園原古墳群では、後期段階に70m級の前方後円墳が多く築造されており、西都原とは対照的な在り方を示す。

国富地域では、国富町の市街地周辺に本庄古墳群が分布している。本庄古墳群には16基の前方後円墳が分布しており、調査例がないため判然としないが、その墳形は中期～後期的なものが多い。

宮崎地域では、大淀川を挟んで右岸側に生目古墳群、左岸側に下北方古墳群が分布している。生目古墳群には140m級の３基（１・３・22号）をはじめとする７基の前方後円墳があり、墳形から前期段階の築造と考えられるものが大半を占める。下北方古墳群には４基の前方後円墳が分布し、全て中期～後期的な墳形である。このことは、前期段階に宮崎平野部において圧倒的な権勢を誇っていた生目勢力が衰退し、中期以降には大淀川下流域の覇権さえも下北方勢力に奪われた可能性を示唆している。また、前述した国富地域は本地域のやや上流域にあたり、本庄古墳群の前方後円墳築造数が生目の衰退以降に増加する傾向がみられる点も重要である。

以上、宮崎平野部の主要古墳群が分布する４つの地域について、その概要を述べたが、日向地方の政治的中心地であったと考えられる本地域の中でも、西都・新富地域の古墳の在り方は、その数や規模の上で際だった存在である（第１表参照）。前期段階では宮崎地域の生目勢力には及ばないものの、複数の首長墓系譜が存在し、中期以降の男狭穂塚・女狭穂塚の築造から祇園原勢力が台頭する状況をみると、西都・新富地域には古墳時代を通じて宮崎平野部を代表する有力な勢力が存在し、中期以降には畿内勢力との深い関わりを持った政治的拠点であったと考えられる。このことは、律令期の日向国府や国分寺等が本地域に置かれたことからも想像に難くない。

第１表　宮崎平野部の主要古墳群古墳構成

古墳群名	指定名称	地域	高塚古墳					横穴墓	地下式横穴墓
			総数	前方後円墳	円墳	方墳	不明		
川南古墳群	川南古墳群（国）	川南・高鍋	60	24	30		6	－	－
持田古墳群	持田古墳群（国）	川南・高鍋	85	10	75			6	－
茶臼原古墳群Ａ	茶臼原古墳群（国）	西都・新富	37	2	35	1		－	－
西都原古墳群	西都原古墳群（特）	西都・新富	323	31	291			15	39
下三財古墳群	三財村古墳群（県）	西都・新富	39	5	33	1	1	－	－
祇園原古墳群	新田原古墳群（国）	西都・新富	190	14	174		1	8	6
山ノ坊古墳群	新田原古墳群（国）	西都・新富	41	6	34		1	4	－
下北方古墳群	下北方古墳群（県）	宮崎	16	4	12			?	9
生目古墳群	生目古墳群（国）	宮崎	34	7	27			9	15
本庄古墳群	本庄古墳群（国）	国富	45	16	29			2	36
合計			870	119	740	2	9	44	105

第３節　西都原古墳群の概要

西都原古墳群は、西都市大字三宅に所在する一ッ瀬川右岸の沖積微高地（標高20m前後）から西に展開する数段の段丘面（標高30～80m）上に点在する古墳の総称である。東西2.6km、南北4.2kmという広大な分布域に、前方後円墳31基、円墳292基、方墳１基、横穴墓15基、地下式横穴墓39基が確認されている[9]。この分布状況や構成する古墳の特徴等をみると、既に指摘[10]があるように、西都原古墳群は小群の集合体である可能性が高い。そこで、異論もあろうが、ここでは14の小群に分ける案（第５図）を提示し、以下、各群毎にその概要を述べる[11]。なお、各小群における古墳構成は第２表のとおりである。

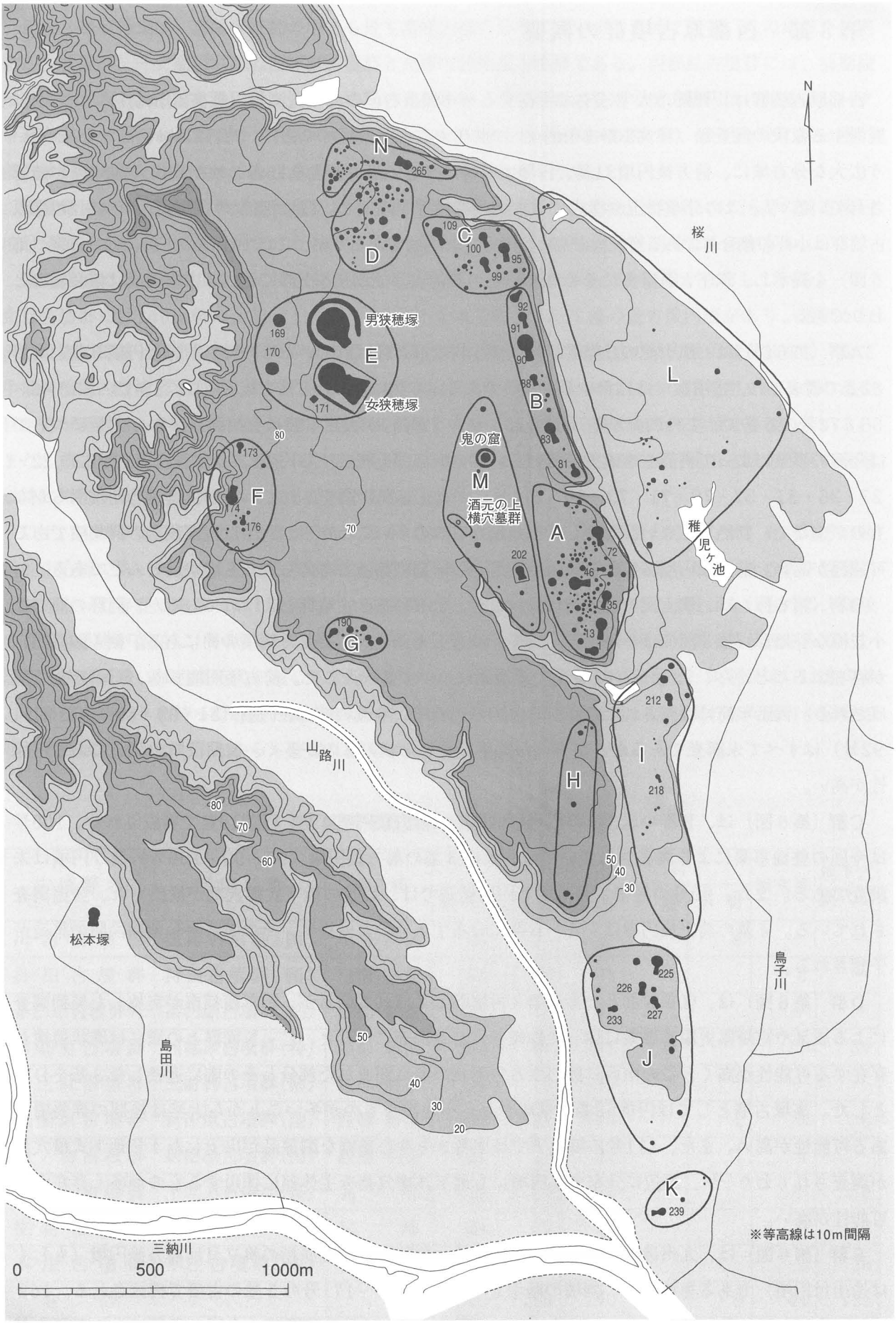
Ａ群（第６図）は、風土記の丘整備以降、第１古墳群と呼ばれていたもので、前方後円墳６基、円墳82基で構成され、古墳数では14群中最大規模である。本群に含まれる前方後円墳は、1・13・35・46・56・72号の６基で、この内の４基（13・35・56・72号）が大正年間に発掘調査され、13号については今回の事業によって再調査を実施している。群の大部分を構成する円墳については、11基（2・22・27・36・51・57・70・71・73・80・274号）が大正年間に調査されているが、築造時期が明らかなものが少なく、判然としない。しかし、小規模なものの多いことから、大半は後期段階の群集墳である可能性が高い。前方後円墳は、調査成果や墳形から前期の築造と考えられるものがほとんどである。

Ｂ群（第６図）は、風土記の丘整備以降、Ｃ群とともに第２古墳群とよばれているが、両群の間には小規模な谷地形（第３図ではわかりにくいが、92号とその北に近接する円墳の間にある。第４図参照）が存在することから、92号から81号までの範囲についてＢ群とした。前方後円墳６基、円墳６基で構成される。大正年間に調査されたのは円墳の84号のみで、６基の前方後円墳（81・83・88・90・91・92号）はすべて未調査であるが、前方部が低平で長い形状のものが多く、前期段階の築造である可能性が高い。

Ｃ群（第６図）は、Ｂ群の北、Ｄ群の東に位置し、前方後円墳４基、円墳19基で構成される。100号は今回の整備事業により調査されているが、他の３基の前方後円墳（95・99・109号）及び円墳は未調査である。また、99号の西側に分布する円墳周辺では、数基の地下式横穴墓が検出され、発掘調査されている。４基の前方後円墳は、Ａ・Ｂ群に分布するものと同様に、その墳形から前期段階の築造が予想される。

Ｄ群（第６図）は、従来Ｎ群とともに第３古墳群とよばれているが、近年西都市が実施した発掘調査による成果や宮崎県史編纂事業に伴って作成された地形図によると、Ｃ・Ｎ両群との間には溝状遺構が存在する可能性が高く、この南西に開口する方形状の溝に囲まれた部分とその南に近接した３基をＤ群とした。高塚古墳としては円墳52基で構成され、小規模なものが多いことから大半は後期の群集墳である可能性が高い。また、111号の墳丘下では甲冑３を含む豊富な副葬品が出土した４号地下式横穴墓が調査されており[12]、周辺に分布する円墳にも地下式横穴墓を主体部に採用するものが多く存在する可能性が高い。

Ｅ群（第６図）は、九州最大の前方後円墳である女狭穂塚、全国屈指の帆立貝形前方後円墳（もしくは造出付円墳）である男狭穂塚、両墳の陪塚とみられる169～171号の５基の古墳で構成される。169～171号は大正年間に調査され、169号とここに報告する171号の両墳は、今回の事業により再調査が



第５図　西都原古墳群全体図（１／20,000）

第６図　Ａ～Ｅ，Ｍ・Ｎ群（１／5000）

なされている。また、男狭穂塚・女狭穂塚は、陵墓参考地として現在立ち入りが制限されているが、平成９年に宮内庁の協力を得て、宮崎県教育委員会が墳丘の測量調査を行った。本群を構成する５基の古墳は、すべて円筒埴輪を有することが知られており、時期的には川西編年Ⅲ期[13]に比定されている。

Ｆ群（第７図）は、Ｅ群の南西に位置し、前方後円墳３基、円墳14基で構成される。本群内においては、これまでに未指定円墳１基が調査されており、円筒埴輪が出土している[14]。また、今回の整備事業に伴い、前方後円墳である173号墳の調査をおこなった。３基の前方後円墳の墳形はそれぞれ異なるが、いずれも前期の範疇に含まれると考えられる。

Ｇ群（第７図）は、Ｆ群の南東に位置し、前方後円墳１基、円墳11基で構成される。前方後円墳としたものは、現在、187号と190号と別々の番号を付されているが、本来同一の古墳であったものが道路によって分断されたものと考えられる。本群には調査された古墳は無いが、比較的規模の大きな円墳が多い。

Ｈ群（第８図）は、Ｇ群の南東の台地先端部付近に位置し、６基の円墳で構成される、３カ所に分かれて分布しており、かなり広範囲に及ぶが、便宜上１つの群とした。調査された古墳も無く、詳細は不明である。

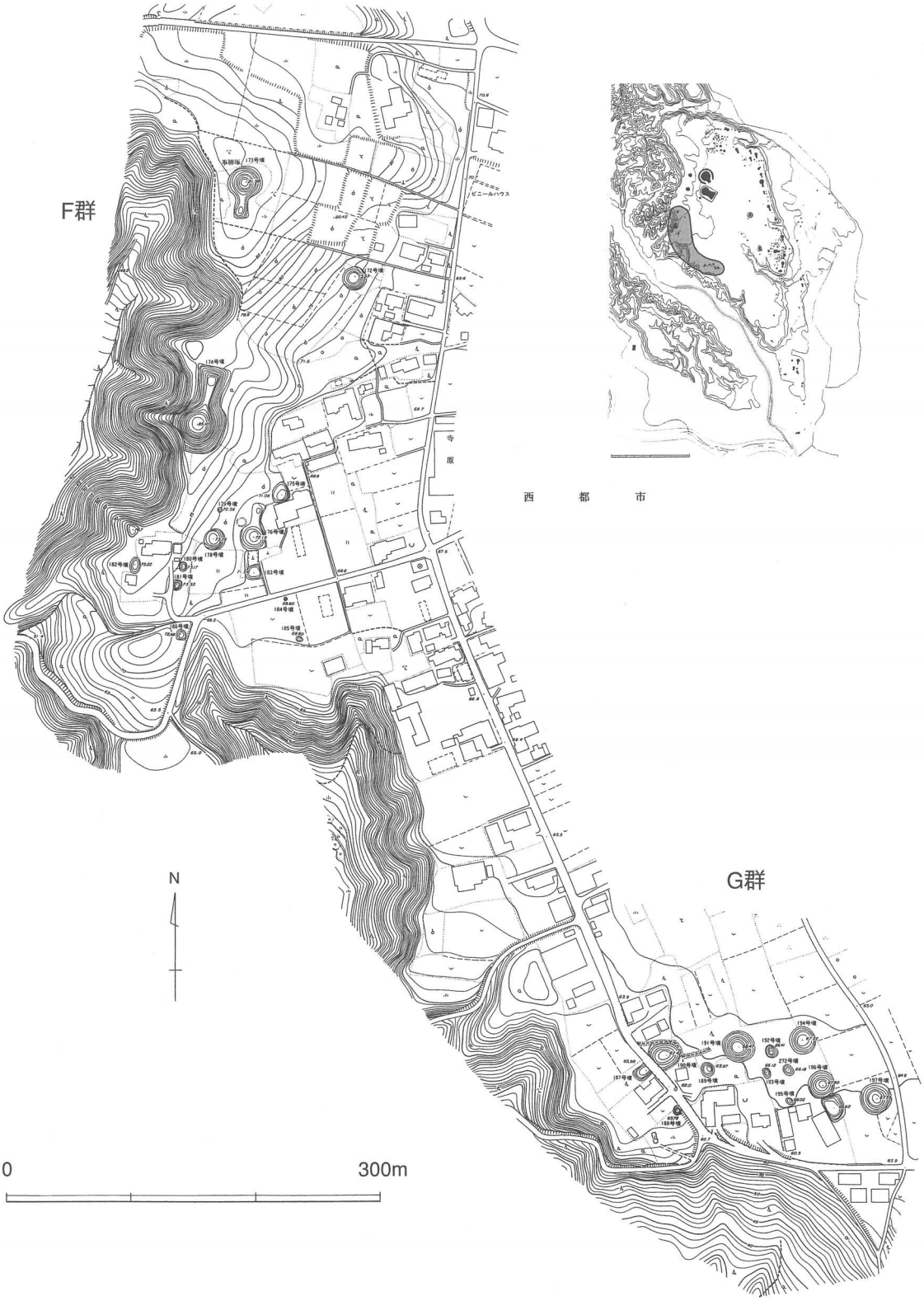
Ｉ群（第８・９図）は、Ｈ群の東側の１段低い段丘面上に位置し、前方後円墳２基、円墳15基で構成される。本群に分布する高塚古墳の調査事例は無いが、平成12年度に西都市が行った市営住宅建設に伴う発掘調査により、消滅円墳の周溝２基とその周溝から竪坑が掘り込まれた地下式横穴墓が４基検出されている[15]。

Ｊ群（第９図）は、Ｉ群と同一の段丘面上南側に位置し、前方後円墳４基、円墳13基から構成される。本群に分布する古墳にも調査例は無く、詳細不明である。

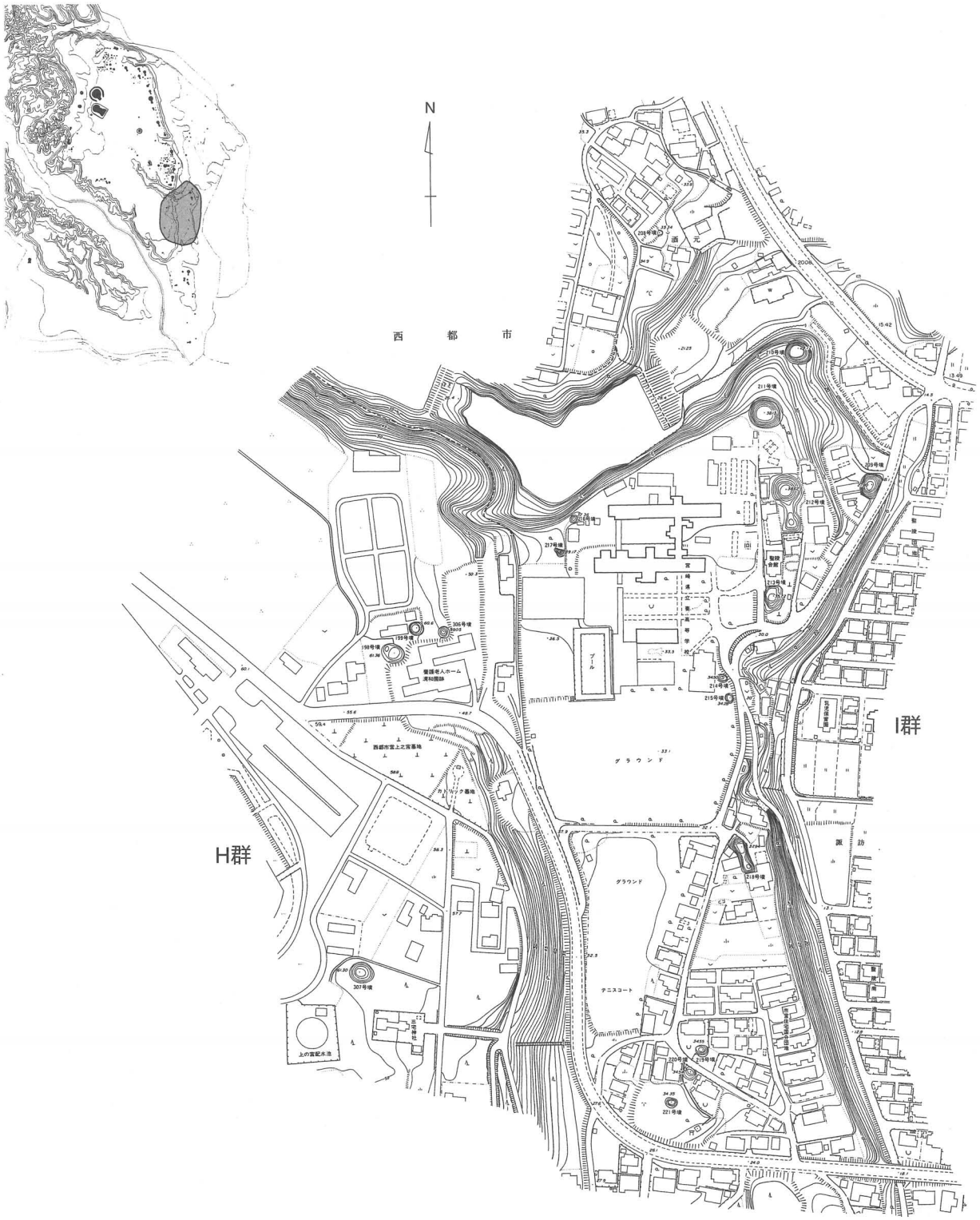
Ｋ群（第９図）は、Ｊ群の更に南に位置し、14群中唯一段丘下の沖積地に立地する。前方後円墳１基、円墳３基で構成され、調査事例が無いことから詳細不明である。

Ｌ群（第10図）は、Ａ・Ｂ群の東に位置し、Ａ・Ｂ群が分布する段丘高位の平坦面から30～40ｍほど低い段丘低位平坦面上に26基の円墳が分布する。分布範囲が広く、更に細分が可能であるが、立地的な特徴及び前方後円墳の分布も見られないことから、ここでは１つの小群として扱っておく。本群に分布する高塚古墳にも調査例は無いが、平成12年度に西都市が行った区画整理事業に伴う発掘調査によって、消滅円墳の周溝２基、地下式横穴墓21基が検出されている[16]。これ以前にも地下式横穴の発見があったようであり、周辺には更に多くの円墳や地下式横穴墓が存在する可能性が高い。また、上述した21基の地下式横穴の中には、竪坑が非常に長大なものがみられ、後述するＭ群で確認された酒元の上横穴墓群との関係を考える上で重要である。

Ｍ群（第６図）は、Ａ群と谷を隔てて西に位置し、前方後円墳１基、円墳８基、横穴墓15基で構成される。本群周辺で１基の地下式横穴墓が検出されたようである[17]が、正確な位置は不明である。202（姫塚）・205・207号が大正年間に調査され、205・206号（鬼の窟）は今回の整備事業にともなって調査されている。鬼の窟古墳は、西都原古墳群最後の首長墓と位置付けられており、現在のところ本古墳群中唯一、主体部に横穴式石室が採用されている。また、平成６年度には本群内で西都市が実施したほ場整備事業に伴う発掘調査で、西都原では初めて横穴墓群の存在が明らかとなった[18]。この酒元の上横穴墓群にみられる横穴墓は、墓道のつきあたりもしくは側面に玄室を掘り込むもので、玄門の手前に不自然な浅い落ち込みを伴うものがあることから、地下式横穴墓との関連が指摘されている[19]。

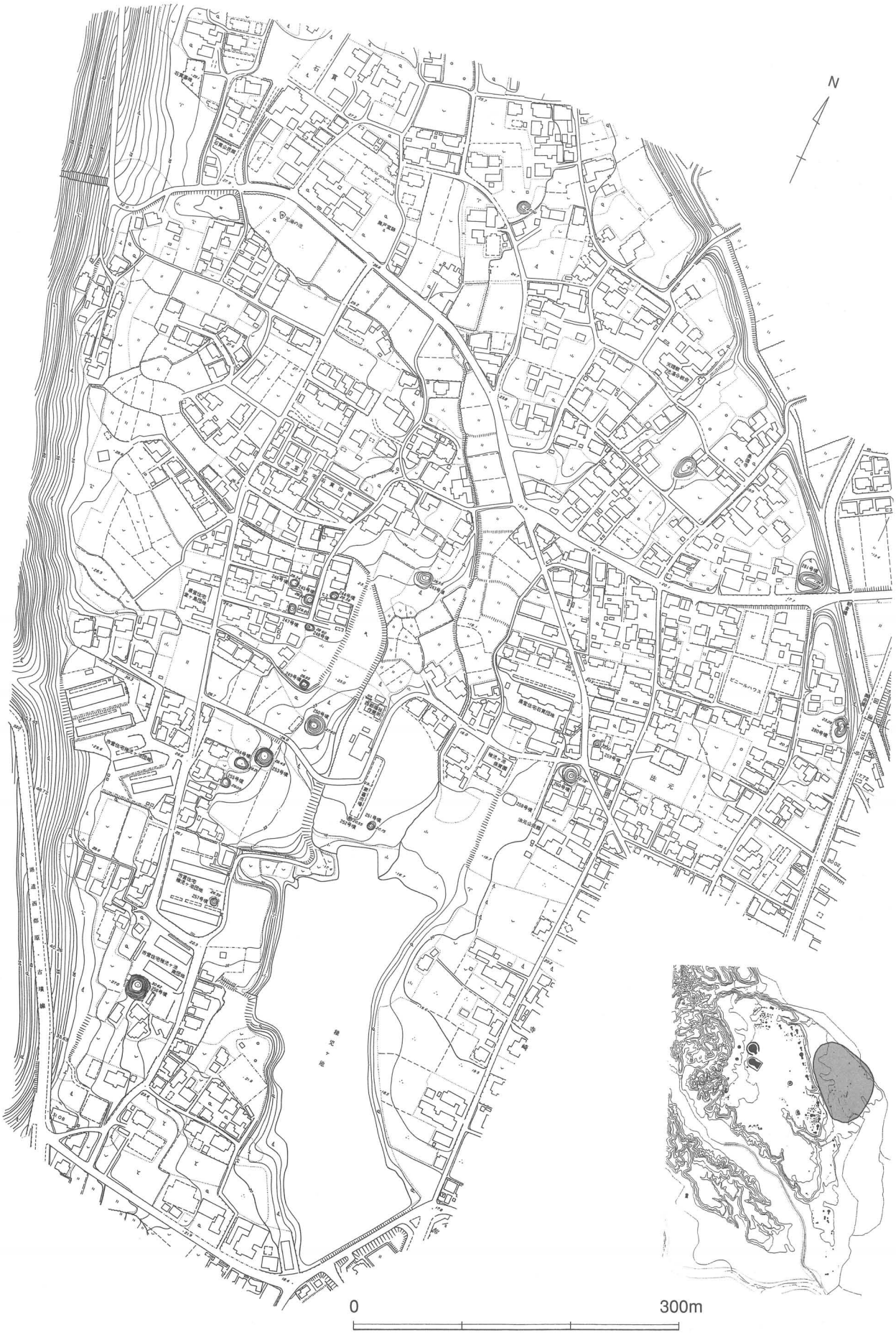


第７図　Ｆ・Ｇ群（１／5000）



第８図　Ｈ・Ｉ群（１／5000）

第９図　Ｉ・Ｊ・Ｋ群（１／5000）



第10図　L群（1／5000）

N群（第６図）は、前述したＤ群の北側に位置し、前方後円墳１基、円墳34基で構成される。前方後円墳の265号（船塚）が大正年間に調査されているのみで、その他の円墳は未調査である。平成11年度に西都市教育委員会が実施した畑の天地返しに伴う発掘調査により、143号に隣接する消滅円墳の周溝が検出されている。また、近年実施された地下レーダー探査の結果などから、本群にも地下式横穴墓が分布する可能性が高い。

以上、各群毎に概要を述べたが、これまでに調査されているのは、全古墳の１割程度にすぎず、古墳群の全体像は未だ不透明である。現状では、前方後円墳の墳丘測量図をもとにした墳形研究が最も有効であり、積極的な築造過程の復元も試みられている[20]。

西都原古墳群では、前期段階にさほど規模に差のない複数の首長墓系譜が存在し、中期段階において畿内勢力との深いつながりが考えられる女狭穂塚・男狭穂塚が登場する。この段階で、西都原勢力は日向地方の広域的首長の座を確立したと考えられるが、その後、明確な首長墓が存在しない空白期を経て、姫塚・船塚の２基の前方後円墳が築造された後、鬼の窟、酒元の上横穴墓群の築造へと続く築造過程が想定される。この築造過程は、限られた情報から想定したものであり、今後も過去の調査成果と近年の調査成果を踏まえた検討を進めていく必要がある。

第２表　西都原古墳群における各小群の古墳構成

小群名	高塚古墳				横穴墓	地下式横穴墓	備考
	総数	前方後円墳	円墳	方墳			
A	88	6	82	－			円墳は番号無し１を含む
B	12	6	6	－		7	
C	23	4	19	－		4	
D	51	0	52	－			
E	5	2	2	1			
F	17	3	14	－			円墳は消滅１（寺原古墳）を含む
G	12	1	11	－			187号と190号は前方後円墳１とした
H	6	0	6	－			２基は上宮古墳と呼ばれているもので、未指定
I	17	2	15	－		4	円墳は消滅２を含む
J	17	4	13	－			
K	4	1	3	－			
L	26	0	26	－		23	地下式横穴墓は堂ヶ島第２遺跡21とそれ以前の崩壊２を含む
M	10	1	9		15	1	円墳は消滅１、番号無し１を含む
N	35	1	34	－			円墳は消滅１を含む
合計	323	31	292	1	15	39	

第Ⅲ章　大正年間の調査

第１節　大正年間の西都原古墳群調査

1911年（明治45年）、貴族院では「史蹟及天然記念物保存に関する建議」が可決され、同建議の趣旨を体した訓令が各県知事に発せられたり、史蹟名勝天然記念物保存協会が誕生するなど全国的に史蹟保存の機運が高まりをみせていた[21]。このような折、宮崎県知事に着任した有吉忠一は、地元有識者による古墳顕彰についての熱心な献言もあり、西都原古墳群の発掘調査を計画した[22]。この発掘調査には、東京帝国大学、京都帝国大学、宮内省、東京帝室博物館などのそうそうたる学者が招聘され、1912年（大正元年）から1917年（大正６年）までの６年間に都合６回行われている。古墳の発掘調査自体難しかった当時としては異例の大調査であり[23]、墳丘形態や埋葬施設の構造、埴輪配列、副葬品など古墳に関する多くの新知見が得られ、日本考古学史上記念すべき調査となった。この調査では、延べ30基の古墳（第３表）が調査され、その結果は３冊の報告書[24]にまとめられている。

第２節　171号（旧112号）墳の調査

171号墳の調査は、６次におよぶ調査の中でも、最初の第１次調査において行われた。第１次調査の期間は正確には不明だが、大正元年12月25日から大正２年１月６日までの内、最大でも11日間と短いことから、精度的にはかなり荒い調査がおこなわれたと考えられる。調査を指揮したのは、京都帝国大学助手の濱田耕作と東京帝国大学助手の柴田常惠である。

資料１～５は、大正４年に刊行された『宮崎縣兒湯郡西都原古墳調査報告』にみられる171号墳に関する全ての記述である。以下、各資料について、その内容を紹介する。

資料１は、大正元年12月27日の調査日誌で、記述の要点は以下のとおりである。

①「一昨日ヨリ引續キ発掘ス」との記述から、調査着手は12月25日であったとみられる。

②墳丘規模は、高さ15尺（約4.5m）、基底部の一辺13間（約23.6m）の方墳である。

③墳頂平坦面の中央部では、地表下１尺（約30㎝）で家形埴輪片及びその基底部、鎧形埴輪片が出土。

④墳頂平坦面の片部附近では、一辺30尺（約９m）の正方形状に並ぶ円筒埴輪列がみられ、北側の埴輪列中央には、１本だけ大型の円筒埴輪がある。

⑤基底部（１段目のテラス）の一部でも円筒埴輪列の存在が確認されたことから、本墳には二重の円筒埴輪列が廻っている。

資料２は、大正元年12月30日の調査日誌で、記述の要点は以下のとおりである。

①墳頂平坦面片部の円筒埴輪列は、１辺当たり約18本ある。北面と西面にほぼ完全な並列状態がみられるが、南面と東面は失われているものが多く、共に３個を残すのみである。

②基底部（１段目のテラス）では、南面と西面にほぼ完全な並列状態がみられ、北面は半数が残

第３表　大正年間調査古墳一覧

現番号	旧古墳名	墳　形	内部施設	出　土　遺　物	調査	調　査　者	報告書
2号	20号	円墳	不明	直刀３，刀子１，鉄鏃21，勾玉１，管玉２，小玉18	４次	柴田常惠	③
13号	2号	前方後円墳	粘土・礫槨	鏡１，勾玉２，管玉40以上，小玉100以上，刀子１，鉄剣１，木片２	５次	内藤虎次郎・今西龍	③
22号	陪塚	円墳	不明	鉄剣１，鉄鏃数個，土師器（坏８以上、高坏）	２次	鳥居龍蔵	③
27号	第0号塚		不明	土師器（甕・高坏）	３次	今西龍・梅原末治	③
35号	3号	前方後円墳	粘土槨	直刀１，鉄剣１，勾玉２，管玉21，鏡１	２次	鳥居龍蔵	③
36号	陪塚	円墳	不明	土師器（坏数個），鉄斧	２次	鳥居龍蔵	③
51号	17号	円墳	不明	直刀３，鉄剣１？，鉄鏃10以上	１次	濱田耕作・坂口昂	①
56号	23号	前方後円墳	不明	鉄剣４	２次	鳥居龍蔵	③
57号	22号	円墳	不明	三股鉄矛，鉄剣，鉄刀，鉄鏃多数	２次	鳥居龍蔵	③
70号	25号（陪塚1号）	円墳	礫床？	なし	１次	黒板勝美・今西龍・三浦敏	①
71号	26号（陪塚2号）	円墳	粘土・礫床？	鉄鏃，歯	１次	黒板勝美・今西龍・三浦敏	①
72号	21号（一本松塚）	前方後円墳	後円部：礫床	鉄剣５	１次	坂口昂・黒板勝美・今西龍・三浦敏・濱田耕作・柴田常惠	①
			後円部：粘土槨	鉄剣４，鏡１，棺外で土師器甕			
			前方部：礫床	鉄剣１，鉄鏃			
			前方部：粘土槨	直刀１，不明鉄器１			
73号	29号（陪塚4号）	円墳	不明	鉄剣２，鉄矛１？，鉄鏃１	１次	今西龍・黒板勝美	①
80号	無号A	円墳	不明	須恵器片（坏・甕）	６次	濱田耕作・梅原末治	②
84号	4号	円墳	不明	鉄剣	３次	今西龍・梅原末治	③
115号	1号	円墳	不明	短甲１，鉄刀１，鉄剣１，鉄鏃，鉄矛，人骨	２次	鳥居龍蔵	③
152号	66号	円墳	不明	なし	４次	柴田常惠・原田淑人	③
156号	60号	円墳	不明	直刀５，鉄剣１，鉄矛１，瑪瑙製勾玉１，瑪瑙玉38，青色玻璃製小玉56，碧玉製管玉４	４次	原田淑人	③
159号	陪塚2	円墳	不明	なし	４次	原田淑人	③
160号	陪塚1（55号）	円墳	不明	鉄剣１，鉄鏃３	４次	原田淑人	③
169号	飯盛塚（110号）	円墳	不明	直刀１，鉄鏃，鉄斧，刀子３，銅釧１，貝輪１，鏡１，玉虫の羽，人骨片，臼歯４，円筒埴輪，器財埴輪	１次	関保之助・増田干信	①
170号	111号	円墳	不明	直刀８，鉄剣７，鉄鏃多数，短甲（頸甲・肩甲を含む）１，円筒埴輪，器財埴輪	１次	関保之助・増田干信	①
171号	112号	方墳	不明	土師器，円筒埴輪，器財埴輪	１次	濱田耕作・柴田常惠	①
202号	姫塚（11号）	前方後円墳	不明	後円部①：直刀１，須恵器提瓶２	１次	黒板勝美・今西龍・三浦敏・濱田耕作・喜田貞吉	①
				後円部②：直刀２，鉄鏃多数，金銅装轡？１，不明鉄器１，須恵器短頸壺１			
				後円部③：直刀１，刀子１，須恵器蓋坏４，瑠璃玉多数，水晶製切子玉10，ガラス製勾玉２，ガラス製管玉２，琥珀製棗玉１			
				前方部：直刀１，鉄鏃23，刀子１，須恵器蓋坏４組			
205号	201号	円墳	不明	なし	１次	柴田常惠	①
207号	200号	円墳	不明	鉄剣５，短甲１	１次	今西龍・濱田耕作・柴田常惠	①
265号	船塚	前方後円墳		直刀３，鉄矛１，鉄鏃100以上，刀子２，管玉19，鏡１	６次	濱田耕作・梅原末治・原田淑人・原勝郎	②
274号	無番号（陪塚3号）	円墳	不明	なし	１次	今西龍・黒板勝美	①
無　号	陪塚	円墳		鉄刀１，鉄鏃，瑠璃玉，歯	２次	鳥居龍蔵	③
無　号	無号B	円墳	不明	土師器（複合口縁壺，高坏）	６次	濱田耕作・梅原末治	②

※報告書欄における①は『宮崎縣兒湯郡西都原古墳調査報告』、②は『宮崎縣西都原古墳調査報告書』、③は『宮崎縣史蹟調査報告』第三冊を示す。

存するのみで、東面は削平をうけており全く残っていない。１面当たり約40本ある。

③墳頂平坦面中央部から検出された屋根形埴輪の下を８尺（約2.4m）掘り下げたが、僅かに１個の素焼き土器の破片が出土したのみで、以前に発掘された可能性が疑われる。

資料３は、大正２年１月２日の調査日誌である。ここでは、墳頂平坦面中央部の調査を継続して旧地表面にまで達したが、遺物等は検出されず、東側で既掘の痕跡を確認したとしている。

資料４は、大正２年１月９日におこなわれた復旧工事の際に埋設した石碑に刻まれた碑文である。調査結果として、墳丘の下半部が葺石で覆われていたこと、上下に２列の円筒埴輪列があり、墳頂平坦面中央部には器財埴輪群が存在したこと、主体部は既掘されており遺物はみられなかったことが記されている。

資料５は調査内容の総括的報告である。古墳名が「二百十號」となっているが、報告内容からみて171号墳に関する報告とみられ、誤記の可能性が高い。報告では、「一、古墳ノ位置外形」、「二、方形ニ繞ラセル埴輪圓筒」、「三、頂上ノ埴輪植物」の３項目にまとめて記述されている。

「一、古墳ノ位置外形」の記述概要は、以下のとおりである。

①本古墳は男狭穂塚後円部の西北外壕近くに位置する。

②南北13間（約23.6m）、東西11間（約20m）のほぼ正方形に近い古墳で、段築を有する。

③基底部（裾部）は耕作により削平されており、特に西南は原形より１間（約55㎝）の削平を受けていると推測される。

④円筒埴輪の配列状況から当初より方墳に築かれたことは明らかである。

「二、方形ニ繞ラセル埴輪圓筒」の記述では、墳頂部及び基底部附近を正方形状に廻る二重の埴輪列について、各辺の埴輪列の長さと埴輪個数を示し（第４表）、以下のような点にふれている。

第４表　大正調査における墳頂部及び基底部附近の各辺の埴輪列長、埴輪個数

墳頂部

	埴輪列の長さ	現存埴輪数
東南	28尺８寸（約8.7m）	17個
西北	28尺８寸（約8.7m）	4 個
北東	30尺３寸（約9.2m）	11個
東西	30尺７寸（約9.3m）	17個

基底部附近

	埴輪列の長さ	現存埴輪数
東南	69尺５寸（約21.0m）	46個
西北	－	－
北東	63尺８寸（約19.3m）	25個
南西	65尺２寸（約19.8m）	27個

⑤墳頂部の埴輪列では、各円筒埴輪の距離が平均一尺二、三寸（約36～39㎝）で、一列当たり二十二、三個が並んでいたと推察される。

⑥西北以外の２面の状況から、各列の中央部には通常よりも大型の円筒埴輪が樹立されていたと考えられる。また、この大型円筒埴輪は、基底部が小形品よりも地中深くに埋設されている。

⑦同一面に並列する墳頂部、基底部附近の埴輪列間の距離が、女狭穂塚に面した東南側で最も大きいことから、東南側を正面とし、西北側を背面としていたのではないか。

⑧基底部附近の埴輪列の内、東南、北東の２面が良く保存されており、各列の中央に前者が１本、後者が２本の大型円筒埴輪の樹立がみられた。

⑨基底部附近の西北側では三層に重ねた円石がみられ、その大きさは３・４寸（約９～12㎝）～８・９寸（約24～27㎝）のものがあるが、５・６寸（約15～18㎝）のものが多数を占める。これは、古墳の表面を葺いていたものである。

⑩円筒埴輪の全体形状は不明だが、漏斗形を為し、基底から５・６寸（約15～18㎝）上部に箍を廻らすものがある。

⑪円筒埴輪の基底部径は、小型のもので６・７寸（約18～21㎝）、大型のもので９寸から１尺（約27～30㎝）に達する。

⑫２・３個の残りの良い円筒埴輪側面にみられる円孔は、その方向が必ずしも一定ではない。

「三、頂上ノ埴輪植物」の記述では、墳頂平坦面中央部から出土した器財埴輪について、以下のような記述がみられる。

⑬中心からやや西南に偏った地点に器財埴輪の破片が多数散乱していた。

⑭その中には家形埴輪の基底部があり、その北東部約３尺（約90㎝）の間に夥しい破片の出土がみられた。

⑮家形埴輪の基底部は長さ１尺８寸（約55㎝）、幅１尺３寸（約39㎝）を測る長方形で、長軸方向が東南・西北の円筒埴輪列に並行する。

⑯家形埴輪基底部の各辺中央から墳頂部円筒埴輪列までの距離は、東南15尺５寸（約4.7m）、西北12尺７寸（約3.8m）、北東９尺３寸（約2.8m）、東西17尺（約5.1m）を測る。

⑰家形埴輪には、応神天皇陵陪塚頂上で発見されたもののように、幾何学的文様や赤色に彩られた痕跡が認められるが、破損状態が甚だしい為、全形の復元は難しい。

⑱家形埴輪の南方では三角形の線刻と朱色の彩色が施された鎧形埴輪が出土した。

以上、大正年間の調査報告内容を紹介したが、古墳の番号や方位の記述に誤りと考えられる点はあるものの、遺構や遺物に関する重要な指摘が多数みられる。これらの指摘については、次章以降の関連する部分で取り上げ、検証することとしたい。

なお、この大正年間の調査で出土した遺物は、宮崎県史編纂事業に伴う資料整理がなされ、平成５年に報告されている[25]。また、この資料については、京都大学の御協力により、今回の調査で出土した資料と共に整理作業を進めている。その成果は第２分冊において報告する予定である。

資料1

第百拾貳號塚

調査者　濱田耕作
仝　　柴田常惠

女狹穗塚ノ西方ニアル方墳ナリ高十五尺敷巾東北拾三間西南仝シク拾參間アリ一昨日ヨリ引續キ發堀ス頂上ヨリ地下一尺ニシテ埴輪ノ家形樣ノモノノ破片續生ス其基礎ラシキ長方形ノ部分ヲモ發見ス又其附近ニ鎧ノ破片ニ似タル埴輪發堀又塚ノ平面部ト傾斜面ノ界ニ長サ約三十尺ヲ一邊トシタル正方形ニ埴輪圓筒ノ並列セルヲ堀リ出ス其數約十五本アリ北方ノ中央ニ大ナルモノ一本アリ又墳ノ其底部ニ同シク同筒ヲ續ラセルカ如シ其一部分發見ス盖シ圓筒ハ塚ヲ二重ニ正方形ニ繞レルナリ所謂方墳ニシテ頗ル珍トスベシ日沒ニ至リ作業ヲ中止ス

資料2

第百十二號塚

調　者　前日ニ同シ

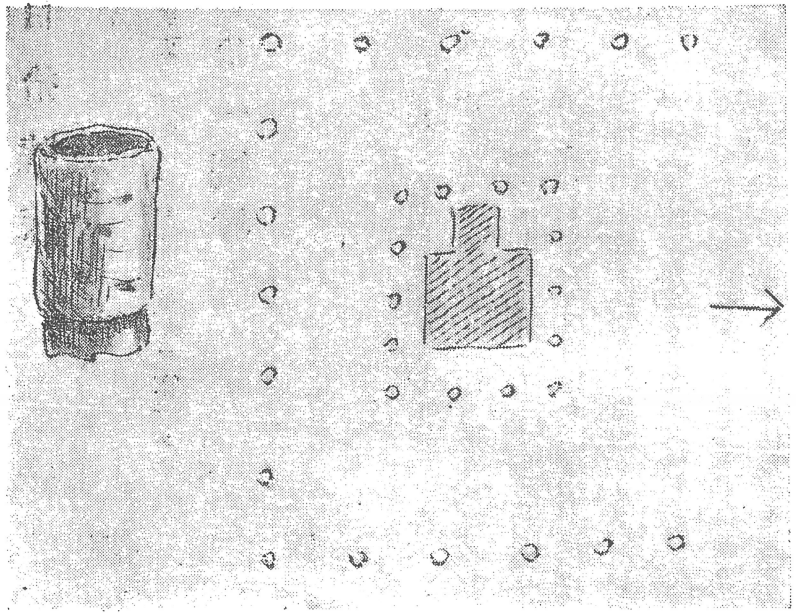
前日ノ作業繼續上段及基底部ノ圓筒ヲ發堀シ其配列ノ狀態ヲ觀各圓筒ノ距離及其數等ヲ精査シタリ上段ハ一方約十八本其中南面及東面ニ於テハ破壞亡失シタルモノ多ク僅ニ兩三個ヲ存スルノミ他ノ二面ニ於テハ殆ント完全羅列セリ基底部ニ於テハ南面西面ニ殆ト完全ナル配列ヲ認メタレトモ北面ハ殆ト其半數ヲ殘セルノミ東面ハ　ニ曾テ發堀除去セラレテ全ク之ヲ見ルコトヲ得ス其數ハ一面ニ於テ約四十個アリ午後ヨリ更ニ頂上部ノ發堀ヲ進メ屋根形埴輪ノ下方ヲ深ク堀下ルコト八尺其間僅ニ一個ノ素燒土器ノ破片ヲ見出セルノミ尚深ク堀下クルニ非スバ不明ナレ　ニ一旦發堀セシニ非サルカヲ疑フ

資料3

第百十二號塚

調　者　柴田常惠

前日來續行ノ中心部發堀ヲ進メ地平面ニ及ビシガ何等ノ遺物ヲ發見セス其東側ニ於テ嘗テ發堀セシト覺シキ罅隙ノ存在ヲ認メシニ過ギズ



第11図　資料２に伴う挿図

資料4

百拾貳號

大正元年十二月調査

周圍ノ下半部ハ礫石ヲ以テ覆ハレ四面ノ上下ニ二匝ノ埴輪アリ頂上ニ樹物ノ殘片ヲ發見ス

堀ノ痕跡アリ内部ニ遺物ヲ發見セス

調　　者　京都帝國大學文科大學講師　濱　田　耕　作
東京帝國大學理科大學助手　柴　田　常　惠
宮　崎　縣　知　事　有　吉　忠一誌

第二百十號塚

濱田耕作
柴田常惠

一、古墳ノ位置外形

本古墳ハ「オサヲ」塚古墳ノ後圓部ノ西北外壕ニ近ク位シ北方ニ丘陵漸ク起リ西南部ハ平地ニ連ル南北約十三間東西約十一間餘略ボ正方形ニ近キ古墳ニシテ不明亮ナカラニ段ヲナセルモノ、如ク表面芝草ヲ以テ被ハレ二三ノ樹木ノ生ゼルヲ見ル其ノ基底ハ年ヲ經テ漸ク犂鋤セラレ北西兩面殊ニ西南ハ原形ヨリ約一間ヲ削リ取ラレタコトハ其傾斜面ノ現状及埴輪ノ位置ヨリシテ之ヲ推測スルニ難カラズ。

方臺状ノ古墳ハ支那秦漢時代ノ陵墓ニ之ヲ見ル可ク本邦ニ於テモ時ニ方形ニ近キ古墳ヲ認メザルニアラズ然レドモ田圃ノ間ニ介在セルモノハ多ク犂鋤ノ厄ヲ蒙リ現状ヲ失ヒ果シテ其ノ當初ヨリ方墳ニ築カレシモノナリヤ將圓形ヨリ變ジテ方形ノ觀ヲ呈スルニ至リシモノナルカヲ確メ難キコト尠カラズ然ルニ本古墳ニ至リテハ後ニ説クガ如ク本ノ表面ニ繞ラシタル二重ノ埴輪圓筒ノ全ク方形ヲ成セル點ヨリシテ疑モナク當初ヨリ方臺状ノ古墳ナリシコトヲ明ニスルヲ得我國ニ存在セル方形古墳ノ研究上寄與スルトコロ大ナリトイフベシ

二、方形ニ繞ラセル埴輪圓筒

本古墳ハ頂上及基底ニ近キ處ヲ埴輪圓筒ヲ以テ二重ニ圍繞シ其形共ニ正方形ニ近シ頂部ヲ周ラセル圓筒線ハ

東南側	二十八尺八寸	現存圓筒十七個
西北側	二十八尺八寸	現存圓筒四個
北東側	三十尺三寸	現存圓筒十一個
東西側	三十尺七寸	現存圓筒十七個

アリ各圓筒ノ距離平均一尺二三寸ニシテ當初ハ一側二十二三個ヲ連ネシコトヲ推測ス可ク各側ノ約中央部ニハ他ヨリ較々大ナル圓筒ヲ一筒宛樹立セシメタルコト西北側以外ノ二面ニ於ケル實際ニ於テ之ヲ認ム可ク此大形圓筒ハ小形圓筒ヨリ深ク地中ニ埋没シテ其ノ地表ニ現ハレタル部分ニ於テハ他ト格別ノ外觀ヲ示セシモノニ非ザルヲ推察セシム。

基底ニ近く繞ラシタル埴輪圓筒線ハ其頂部（内部）圓筒線ヲ距ルコト（約中心ニテ測定ス）

東南側	二十四尺九寸
西北側	二　十　尺
北東側	二十　三　尺
東西側	二十二尺四寸

アリ即チ西北側ニ於イテ兩者相接シ東南側ニ於イテ相距ルコト大ナルヲ見ルベク此點ヨリ見レバ本古墳ハ或東南側（主陵ニ面シタル）ヲ正面トシ西北側ヲ背ニシタルモノニ非ザルカヲ思ハシム（第一圖）

此ノ外部圓筒線ノ東南側ハ切リ取ラレテ不完全ナル痕跡ヲ留ムルモノナレト東南北東ノ二面ハ頗ルヨク保存セラレテ前者ハ長六十九尺五寸現在圓筒四十六個ニ及ヒ約中央ニ一個ノ大圓筒ヲ埋ム後者ハ全長六十三尺八寸現存圓筒約二十五個中央部ニハ二個ノ大圓筒アリ南西側ハ全長六十五尺二寸ニシテ頂上部ノ埴輪ノ南邊ヨリ二十三尺ヲ距テ一尺三四寸ノ距離ニ十七個ノ埴輪ヲ有スレト尚十二個ノ崩壊ノ為メ其存在ヲ知ル能ハサルニ至リシト思ハル　個所アリ。

西北側ハ下方ノ畑地ノ為ニ著シク切取ラレ埴輪配列ノ状態ヲ見ルニ由ナカリシカ封土ヲ取リ去リテ其土質ヲ檢スルニ基底ハ黑色土ニシテ付近ノ平地ニ於ケル土質ト異ナルコトナク其上層ハ厚サ一尺ノ黄色土ヲ置キ更ニ其上方ニ約一尺ノ黑色土ヲ置ケルアリ黑色土ノ上方ニハ圓石ヲ三層ニ重ネテ約一尺ノ厚サヲ為セルガ圓石ハ徑三四寸ヨリ八九寸ニ達スルモノアレド五六寸ノモノヲ多シトス圓石ノ上方ハヤガテ表面ノ覆土ニシテ草根ヲ交ユル土壤ナルガ其ノ厚サ約五六寸ヲ有ス思フニ少クトモ此部分ニ於テハ圓石ヲ以テ塚ノ表面ヲ葺キシモノナルガ表面ノ覆土ハ多年ノ間ニ自ラ堆積スルニ至リシモノナルベシ。

此等發見ノ埴輪ハ纔ニ其下底部ヲ存ズルニ止マリ上部ノ大半ハ散逸シテ其全形ヲ知ル能ハザレドモ漏斗形ヲ為スモノ、如ク底面ヨリ五六寸ノ上部ニ箍ヲ廻ラスアリ底面ニ於ケル其直底ハ小形ノモノニテ六七寸許大形ノモノニテ九寸ヨリ一尺ニ達ス埴輪ノ側面ニ附スル所ノ貫通スル圓孔ハ二三ノ漸ク之ヲ殘存スルモノニ就テ見ルノミ其方向必ラズシモ一定セズ外側ニ向ヘルモノト左右ノ兩側ニ在ル他ノ埴輪ニ對スルトアリキ。

三、頂上ノ埴輪植物

頂部圓筒線ノ内部ハ略ボ平坦ニシテ其ノ中心點ヨリ少シク西南ニ偏シタル所ニ埴輪樹物ノ破片多數ニ散亂シ家屋形トモ名ク可キ樹物ノ基礎部ナホ明ニ地中ニ埋没セルコトヲ發見セリ其ノ破片ハ夥シク其附近殊ニ北東部約三尺ノ間ニ散亂ス此ノ基礎部ハ長一尺八寸幅一尺三寸ノ長方形ニシテ東南西北ノ圓筒線ト其ノ長邊ヲ並行セリ今マ其ノ位置ヲ明ニセンガ為此家屋形埴輪ノ各邊中央ヨリ頂部圓筒線トノ距離ヲ左ニ掲ゲ。

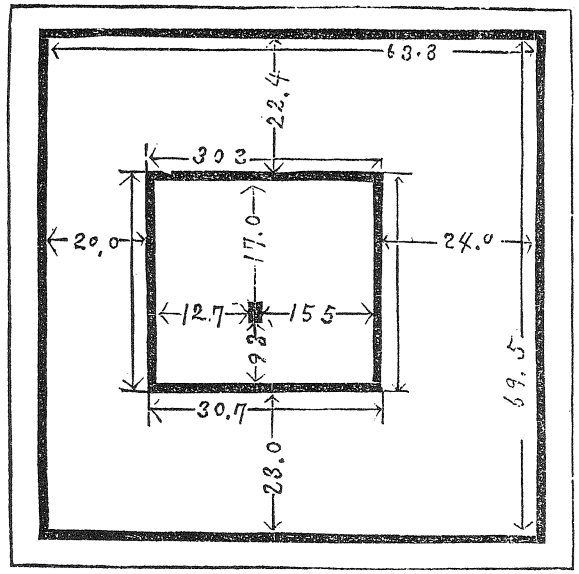
東　南　十五尺五寸
西　北　十二尺七寸
北　東　九尺三寸
東　西　十七尺

此ノ埴輪ニハ各種幾何學的紋様ヲ刻畫シタルコト例ヘバカノ應神天皇陵陪塚ノ頂上ヨリ發見シタル家屋形埴輪ノ破片ノ夫レノ如ク又タ赤色ニ彩ドレル痕跡ヲ認ム可シ只ダ其破殘甚ダシクシテ容易ニ全形ヲ復元スルコト能ハザルヲ遺憾トス（第二圖）

家屋形埴輪ノ南方ニ近ク鎧形埴輪ヲ發見ス其形状古墳發見ノ「カハラ」ヲ示シ三角形ノ刻線朱色ノ彩色筆ヲ施セルヲ見ル

第壹圖

第二百十號古墳埴輪配列圖



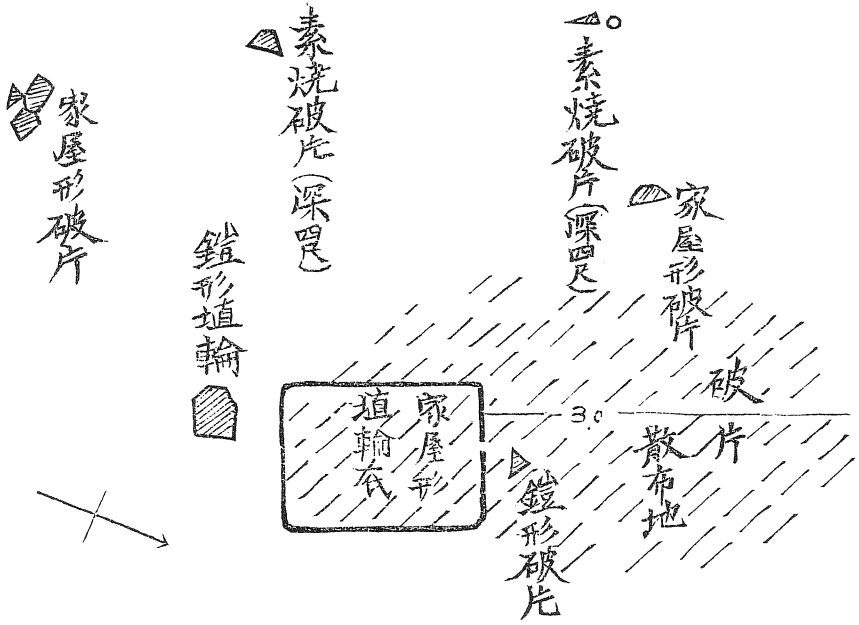
埴輪圓筒線

家屋形埴輪

第12図　資料５に伴う挿図①

第貳圖

第二百十號古墳頂部埴輪位置圖



第13図　資料５に伴う挿図②

第Ⅳ章　墳丘と周溝

第１節　墳丘の形状

今回の調査では、北東側を除いてほぼ全面的な墳丘の検出を行った（第14図）。この結果、大正の調査成果に同じく、墳丘斜面が葺石に覆われた２段築成の方墳であることを確認した。

第15・16図は墳丘の主軸断面図である。墳丘は草根がびっしりと混入した現表土（１層）に覆われ、その直下に黒褐色土（２層）の堆積がみられた。この２層は、部分的に葺石の直上に堆積しており、墳頂平坦面中央部及び片部付近や１段目テラス片部付近にみられる大正時代の調査坑によって切られることから、大正当時の旧表土層にあたると考えられる。

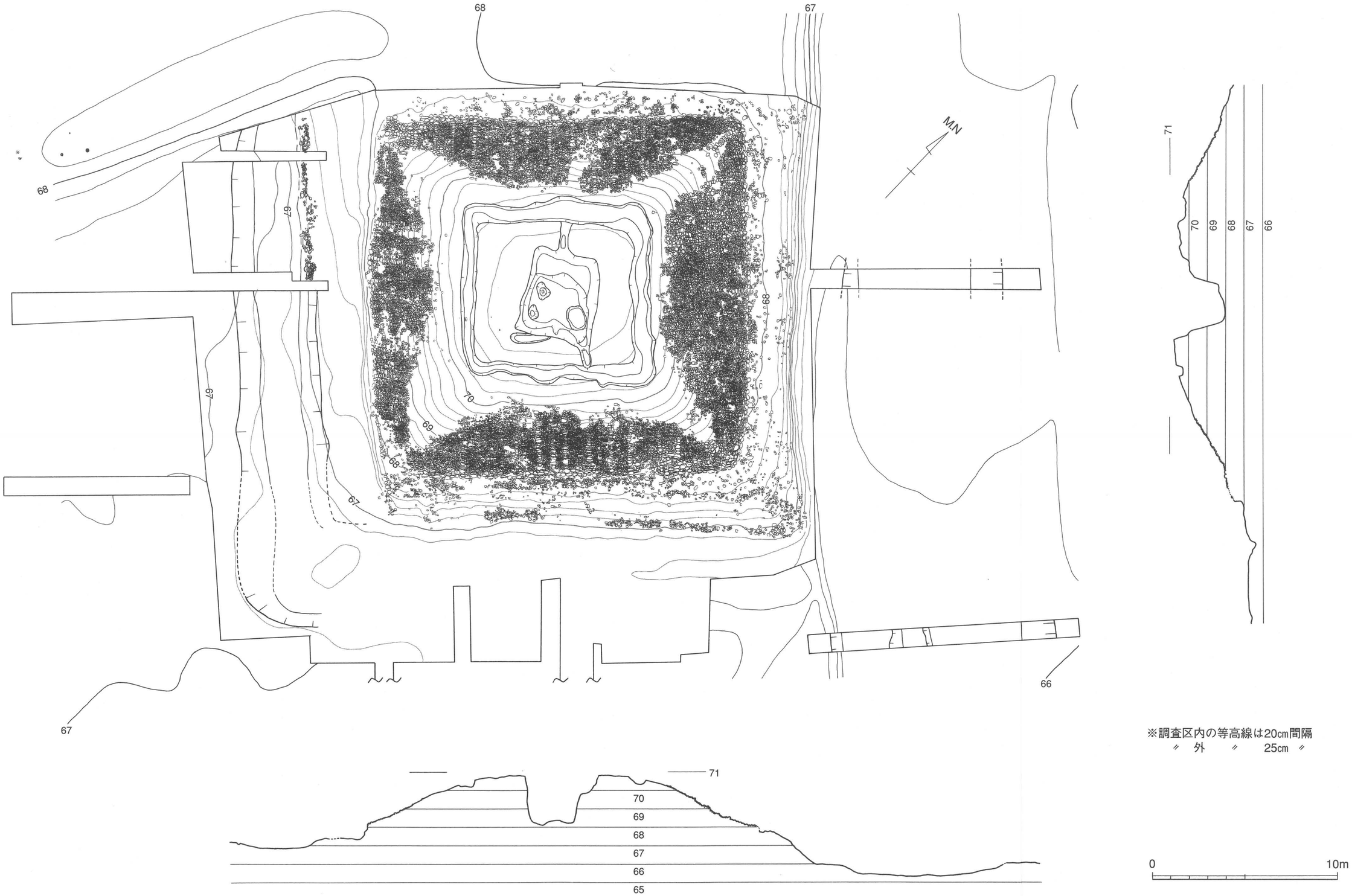
墳丘２段目の形状

墳頂平坦面から２段目斜面の上位では、この２層直下にアカホヤ火山灰等の地山ブロックを混合した墳丘封土がみられた。この墳丘封土は墳頂平坦面中央部から片部へ向かってわずかに傾斜しているが、比較的築造時の形状に近い状況と考えられる。しかし、２段目墳丘斜面上位は、斜面下位の葺石がのこる部分が各面ともほぼ30°の角度で立ち上がっているのに対して傾斜が緩やかであり、葺石の崩落と墳丘封土が流失していると考えられる。なお、墳頂平坦面と２段目斜面との境界付近は前述のとおり大正時代の調査坑で攪乱されているため、その境界については明らかではない。２段目斜面の下端には南西側を除いてほぼ完全な根石列が確認された。この根石列は１辺19m前後の方形状に復元可能で、１段目テラスとの境界となっている。この根石列から墳頂の墳丘封土面までの比高差は約2.8mである。

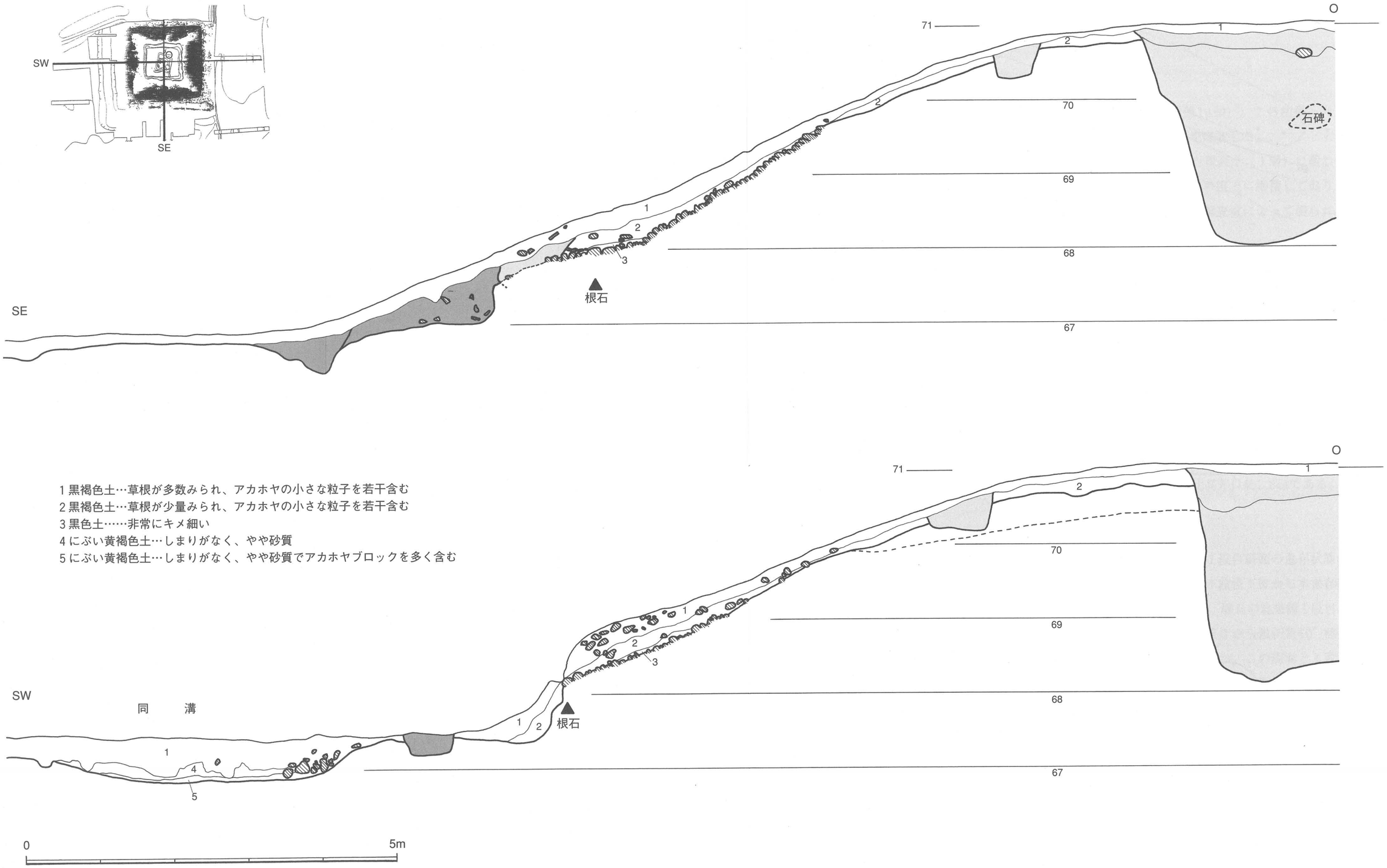
墳丘１段目の形状

１段目テラスは、片部付近が大正時代の調査坑で攪乱を受けていることや１段目斜面の遺存状態が悪いことから、各主軸断面をみてもその幅は不明瞭である。墳丘の南東側では１段目下位から本来存在したとみられる周溝にいたるまで削平を受けており、その墳端位置は不明である。墳丘の北東側１段目は、２段目根石列の約３m外側から地山が約30°の角度で２mほど外側へ延び、そこから傾斜角40°前後の崖状地形を呈している。その崖下から３m外側では女狭穂塚の周溝が確認された。この周溝と１段目斜面の傾斜が変換する地点までの間は削平を受けている可能性が高く、墳端の位置は不明である。墳丘の北東側では、１段目テラスにみられる大正調査坑の外側で地山が下方へ強く傾斜し、葺石はみられなかったものの、この面が１段目斜面とみられる。更に外側の状況については未調査のため不明である。墳丘の南西側では２段目根石列付近から１段目墳丘が大きく削平されていたが、その外側で周溝が確認された。その周溝の墳丘側斜面には根石列を伴う葺石がみられ、ここが南西側の１段目墳端と考えられる。

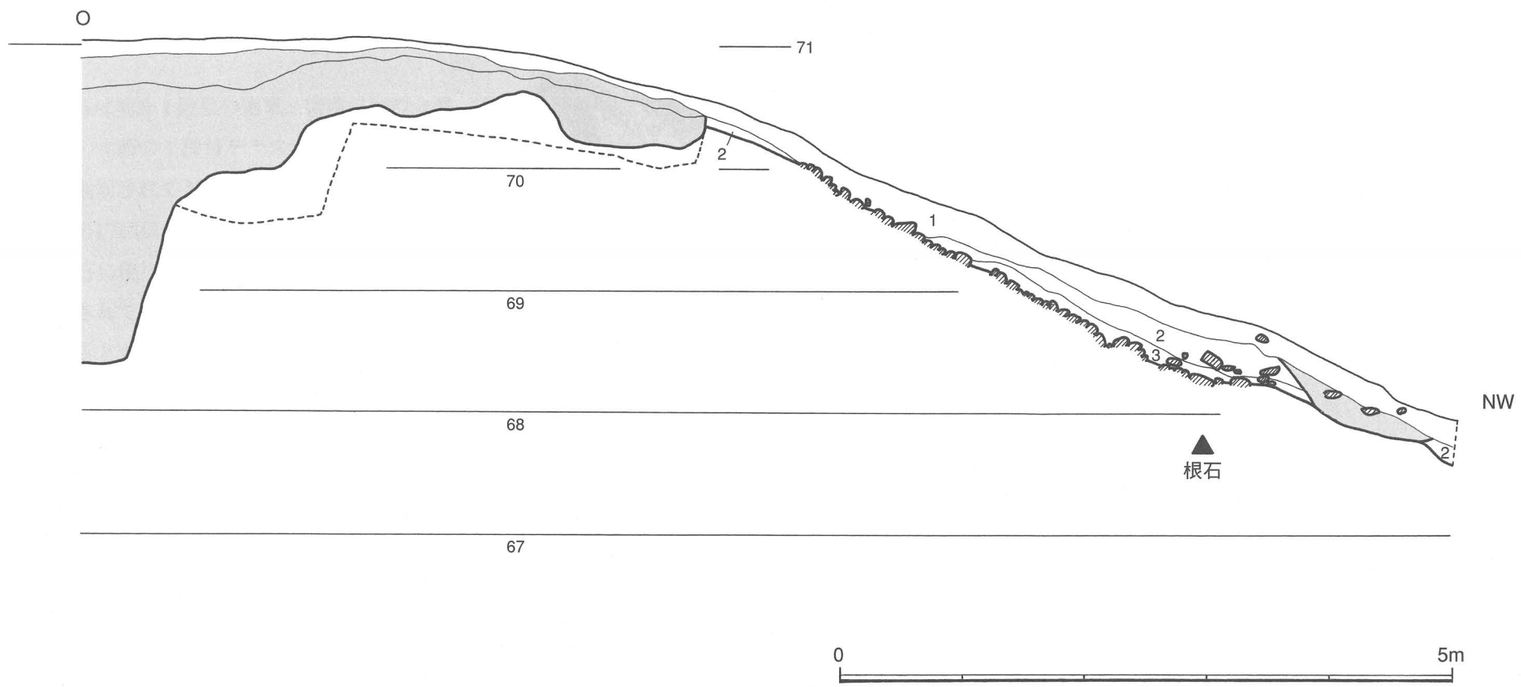
以上のように、墳丘各部の位置は２段目墳端を除いて不明瞭な状態といわざるをえない。墳丘各部の規模や形状、築造規格等については後章において検討する。

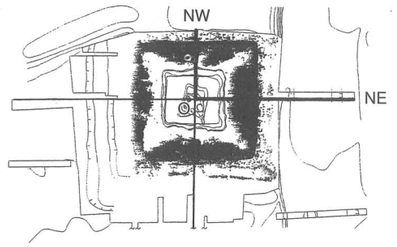


第14図　墳丘及び周溝検出状況（１／200）



第15図　墳丘断面図①（上段：O－SE，下段：O－SW）（1／50）

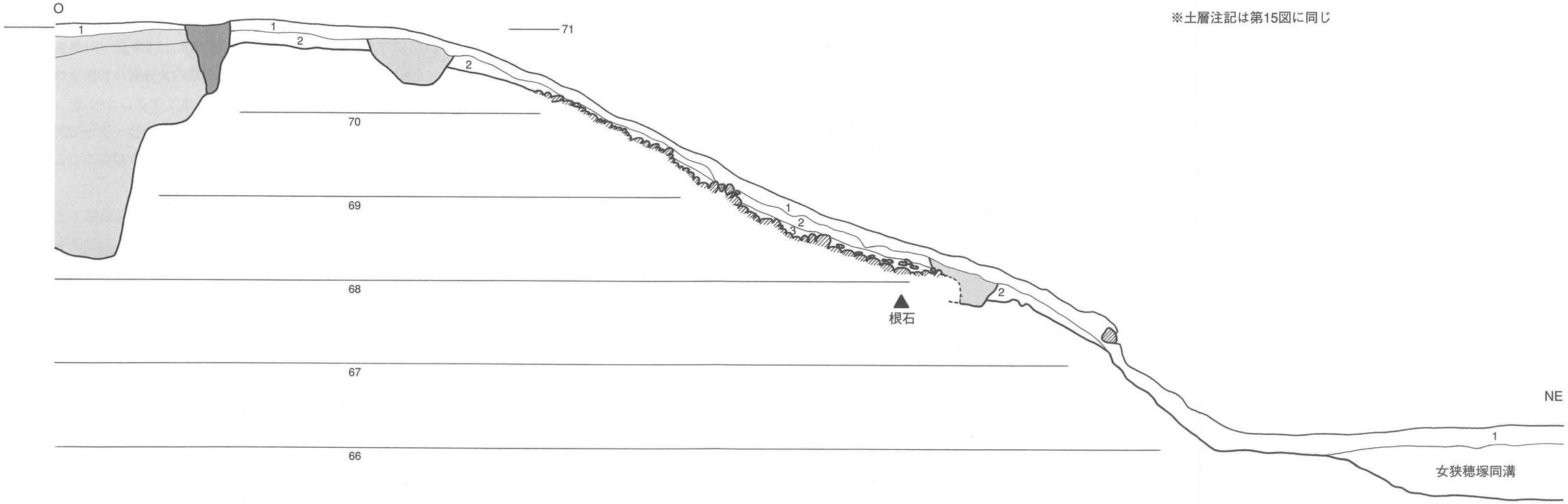




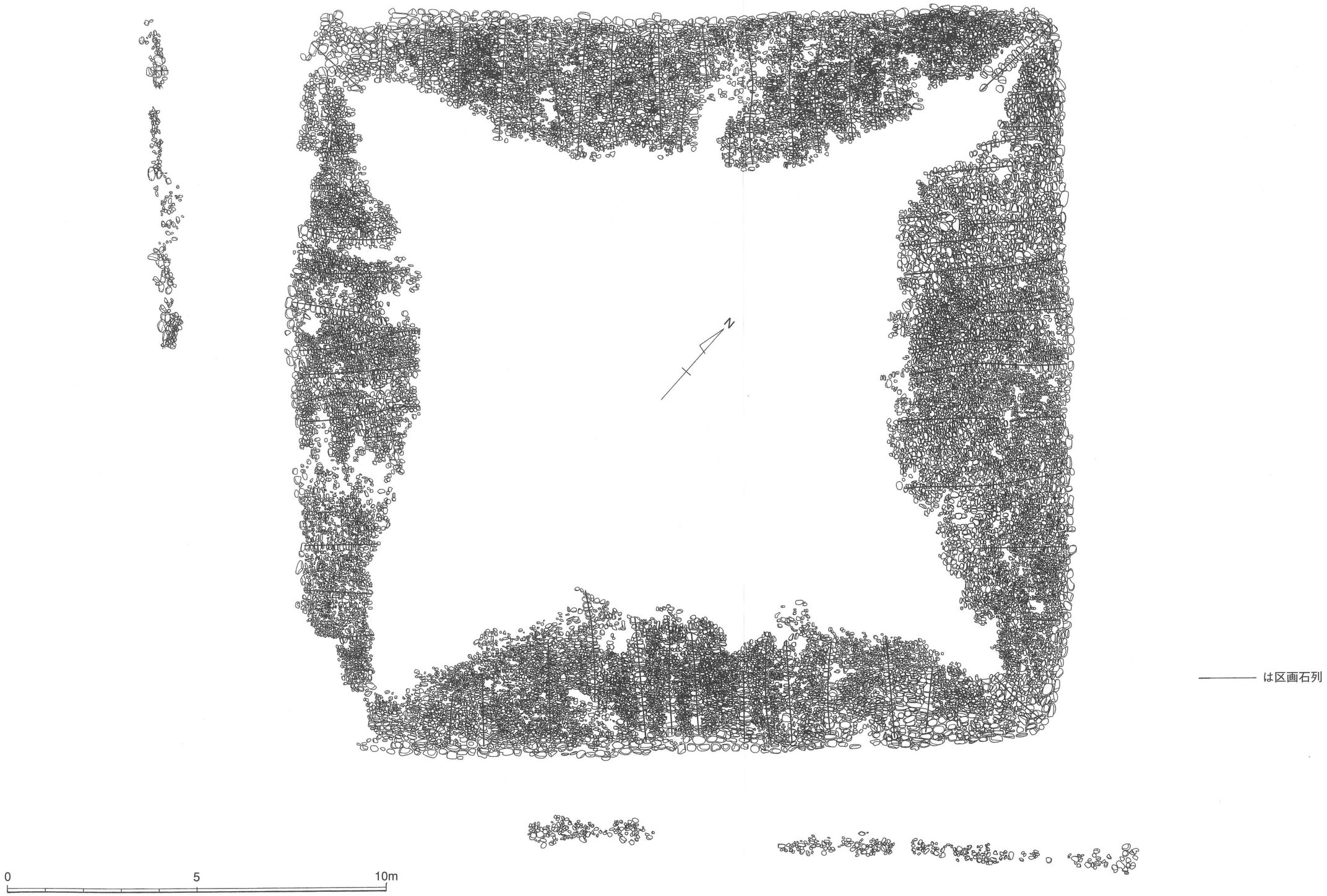
は大正調査坑

は撹乱

※土層注記は第15図に同じ



第16図　墳丘断面図②（上段：O－NW，下段：O－NE）（1／50）



第17図　葺石検出状況（1／100）

第２節　葺　　石

葺石は墳丘１段目の南東・南西斜面の一部、墳丘２段目の全ての斜面で検出された。第13図では南東・北東・北西の１段目テラスから検出された礫が図化されているが、テラス部分は大正時代の調査時に大きく掘削されており、この礫は２段目斜面からの転落もしくは復旧工事の際に混入したものと考えられる。第17図は、第14図においてほぼ原位置を留めていると思われる礫のみ図化したものである。

葺石に使用されている礫には、最大長が10cmに満たないものから50cmを超える比較的扁平な円礫が使用されている。礫の大半は砂岩であり、その供給地は西都原台地の東約２kmを南北に流れる一ツ瀬川の河原と考えられる。

墳丘２段目斜面の状況

葺石の大部分には10～20cm大の礫が使用され、墳丘面に対して礫の長軸を縦に差し込むように葺かれていた。ただし、長軸を横にして葺かれていたり、50cmを超える礫が使用されている部分もある。また、斜面上位及び各コーナーの稜線付近では、葺石の遺存状態が悪かった。

２段目斜面部下端には、長軸40cm前後の通常よりも大きな礫を横置きに並べた根石列がみられた。この根石列は南西面では中央部付近に数個みられるのみだが、他の３面ではほぼ完全に遺存しており、前述したように、本来は１辺19m前後の方形に廻っていたと考えられる。また、根石が２列になる部分もみられる。

２段目斜面部の葺石には、礫を縦方向に並べた区画石列がみられた。各面において確認された石列数は、南東13、北東17、北西19、南西15本である。この区画石列には根石と同様の大きな礫で構成されるものや通常の葺石大の礫で構成されるものがあり、特に規則性はない。石列の間隔は、狭いところで50cm、広いところで２m前後を測り、間隔も一定していない。また、区画石列の大半は根石列から墳頂へ向かって一直線に並んでいるが、斜面の途中で途切れるものや斜面の途中から墳頂へ続くものもみられる。このほか、崩落している南コーナーを除く各コーナーの稜線上にも区画石列がみられる。

墳丘１段目斜面の状況

南東面では、２段目斜面のように整然と積まれた状況ではなかったが、斜面下半部に葺石と考えられる礫が検出された。この面では墳端が削平を受けているとみられ、根石列は確認できなかった。また、第14図では、東コーナー稜線付近からも礫が検出されているが、２段目の状況から明らかなように、コーナー稜線付近は葺石が遺存しにくいと考えられる点や出土状態からみて、墳丘上位より崩落した礫である可能性が高い。

南西面では、２段目根石列付近からほぼ垂直に落ちる崖状の地形となっており、１段目墳丘の大部分が失われた状態であった。しかし、その現況墳端から２mほど外側に周溝が検出され、周溝の墳丘側斜面では南西主軸から西コーナー付近にかけて葺石がみられた。部分的にしか残っていなかったため、礫の葺き方について詳細な観察はできなかったが、周溝の下端付近には根石列がみられ、縦の区画石列とみられる部分も確認された。

葺石の遺存状態が１段目と２段目で大きく異なっていたことは、墳丘封土が２段目は盛土で整形され

ているのに対して１段目は地山削り出しであったため、礫が安定しなかったことが原因と考えられる。

大正年間の調査報告においては、Ⅲ章であげた資料５の⑨の部分で葺石に触れているが、礫の大きさは同様であるものの、「三層に重ねた」とされる部分は明らかでない。

第４節　周　　溝

大正年間の調査では確認されていなかったが、今回の調査により墳丘の南西側から南コーナー付近にかけて検出された。第14図下段の墳丘南西主軸断面図をみると、２段目斜面部端から周溝までの間が大きく削平され、１段目テラスと１段目斜面部が失われていることがわかる。この墳丘１段目が失われた部分は幅約２ｍほどの平坦な地形となっており、その外側に上端幅4.5ｍ前後、下端幅２ｍ前後、深さ40㎝ほどの浅い溝が確認された。この溝は東コーナーへ向かって延びていたが、残念ながら調査できなかった。

この溝は南コーナー付近にも続くことが確認されたが、墳丘南東側では既に削平され、確認できなかった。しかし、この南コーナーの検出状況から、南東側に同様の溝が廻っていたとすると、上端幅5.5ｍ、下端幅４ｍ前後に復元され、南西側よりも幅の広い周溝となる。

墳丘北東側は、２段目根石列から２ｍほど外側で崖となり、隣接する女狭穂塚の中堤との間は大きな溝状の地形となっていた。このため、北東側の主軸トレンチを女狭穂塚中堤付近まで延長したところ、上端幅8.5ｍ、下端幅６ｍ、深さ60㎝ほどの溝が検出された。この溝については後述するが、女狭穂塚の中堤に沿って設定した９本のトレンチでも確認されたことから、女狭穂塚の二重目の周溝と考えられる。現況の地形及び北東面主軸断面の状況から、この面も南西面と同様に墳端が大きく削平されているとみられ、旧地形を復元した場合、この溝の171号墳側斜面は１段目墳丘斜面の一部と想定される。ただし、この溝の171号墳側では葺石は確認できなかった。

以上、今回の調査で確認された171号墳の周溝の状況を述べたが、北西側では調査がなされていない等、未だ不確定な部分は多い。しかし、上述した状況から考えると、171号墳は北西・南西・南東側をコの字状に廻る周溝を有し、北東側において女狭穂塚と周溝を共有していた可能性が高い。また、この女狭穂塚周溝と171号墳南西側周溝の基底部は1.3ｍほどの比高差があることから、171号墳の周溝は、北・東コーナー付近で女狭穂塚周溝の斜面に接続されていたと考えられる。

註

（１）宮　崎　県　1915『宮崎縣兒湯郡西都原古墳調査報告』
　　宮　崎　県　1917『宮崎縣西都原古墳調査報告書』
　　宮　崎　県　1918『宮崎縣史蹟調査報告』第三冊
（２）宮崎県教育委員会　1984『特別史跡西都原古墳群　＝西都原風土記の丘＝　』
（３）本事業は、平成10年度から「地方拠点遺跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」に名称が変更されている。

(4) 宮崎県教育委員会　1996『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』
宮崎県教育委員会　1997『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅱ)
宮崎県教育委員会　1998『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅲ)
宮崎県教育委員会　1999『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅳ)
宮崎県教育委員会　2000『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅴ)
宮崎県教育委員会　2001『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅵ)
宮崎県教育委員会　2000「鬼の窟古墳・西都原205号墳」『特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書』第1集
宮崎県教育委員会　2001「西都原13号墳」『特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書』第2集

(5) 宮崎県教育委員会　1999「男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第42集

(6) この地域細分案や地域的特色は、以下の報告書に同様の指摘があるが、地域名称や区分が若干異なる。
新富町教育委員会　1998「祇園原古墳群Ⅰ」国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書」
『新富町文化財調査報告書』第25集

(7) 藤本貴仁　1998「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号　宮崎考古学会

(8) 宮崎県埋蔵文化財センター　2001「平成12年度東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第49集

(9) 古墳の基数については、近年の発掘調査等によって検出された消滅古墳等を含む

(10) 柳沢一男　2000「西都原古墳群」『季刊考古学』第71号　雄山閣出版

(11) 註(10)文献においても、ほぼ同様の案が提示されている。

(12) 日高正晴　1958「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻4号　日本考古學會

(13) 川西宏行　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古學會

(14) 西都市教育委員会　1985『昭和60年度西都原古墳研究所・年報』第3号

(15) 西都市教育委員会　2001『平成12年度西都原古墳研究所・年報』第17号

(16) 註(15)に同じ

(17) 日野　巌　1932「西都原古墳群地下式横穴の遺物配列状態」『日向』第7輯

(18) 西都市教育委員会　1996「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22号

(19) 註(18)に同じ

(20) 柳沢一男　1995「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号　宮崎県　など

(21) 田中　茂　1982「有吉忠一知事と西都原古墳発掘調査」『宮崎県地方史研究紀要』第九輯　宮崎県立図書館

(22) 註(21)に同じ

(23) 古谷　毅　1997「古墳時代：古墳文化編年論と形式学」『考古学雑誌』第82巻3号　日本考古學會

(24) 註(1)に同じ

(25) 高橋克壽　1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第7号　宮崎県

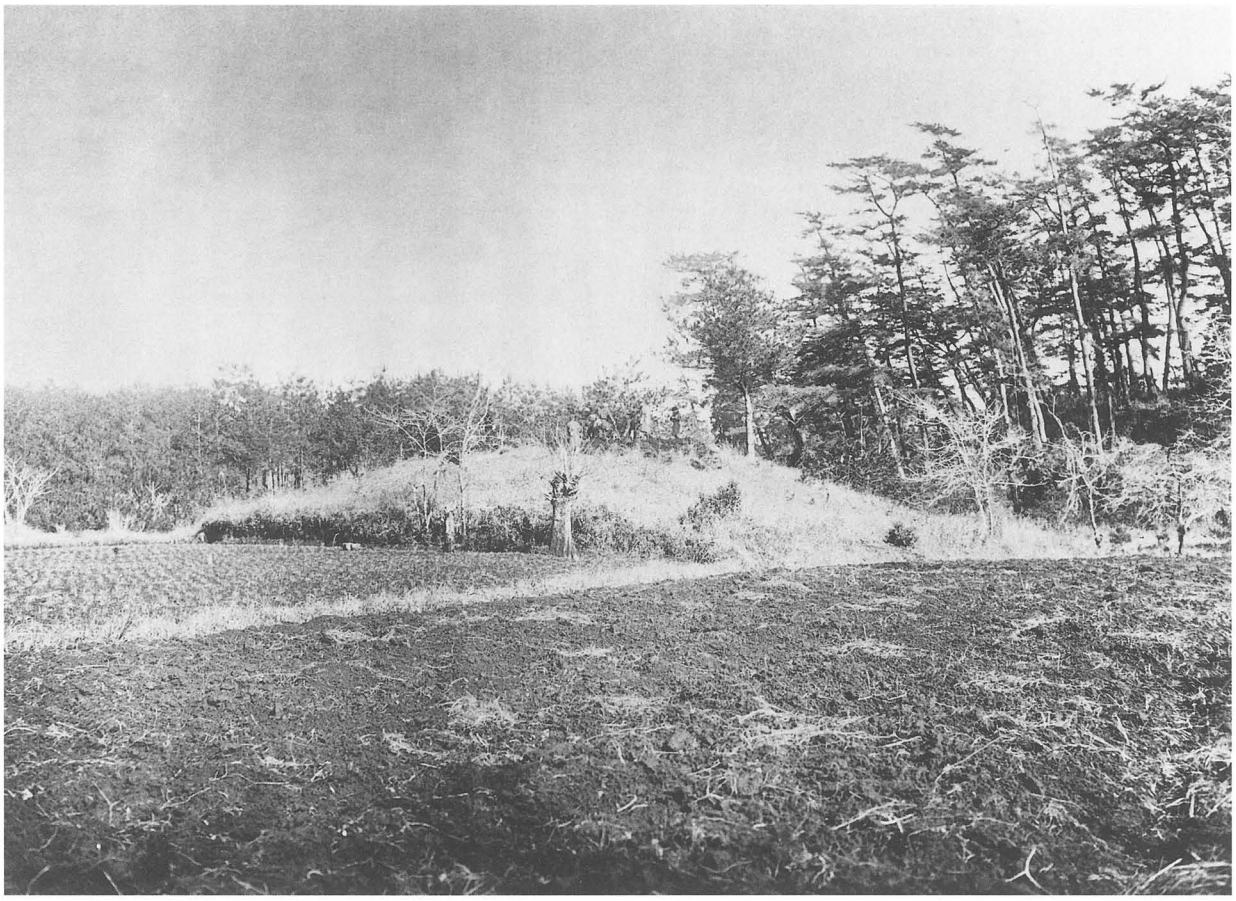
報告書抄録

フリガナ	サイトバルヒャクナナジュウイチゴウフン
書名	西都原171号墳
副書名	
巻次	第1分冊
シリーズ名	特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書
シリーズ番号	第4集
編集者	松林豊樹
発行機関	宮崎県教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎市橘通東1－9－10　TEL 0985－26－7251
発行年月日	2003年3月31日

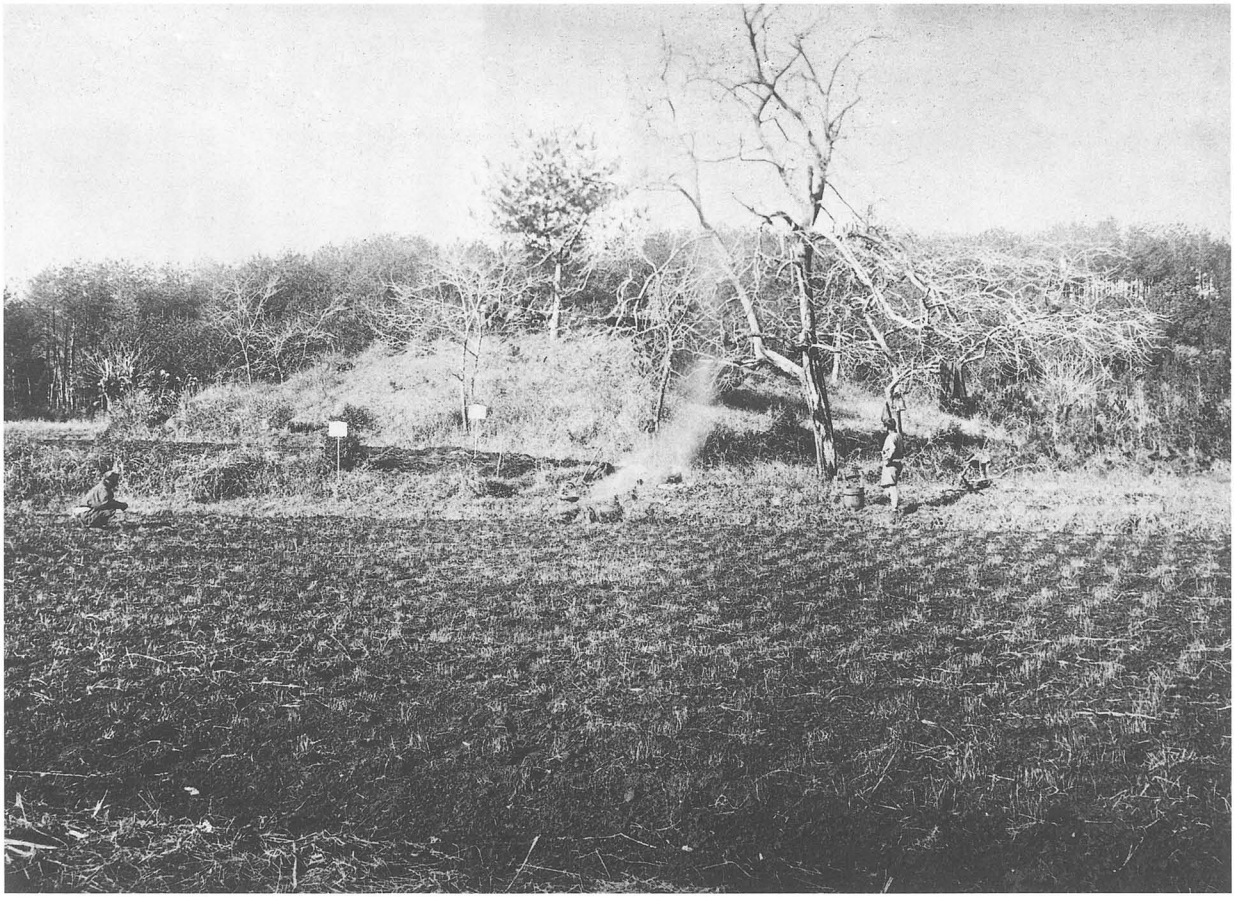
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 (年度)	調査面積 (m²)	調査原因
サイトバルヒャクナナジュウイチゴウフン 西都原171号墳	ミヤザキケン 宮崎県 サイトシ 西都市 オオアザミヤケ 大字三宅	45208	1001 (西都市)	32° 06′ 57″ 付近	131° 23′ 10″ 付近	H10 ～ H12	約800	史跡整備

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古墳 (方墳)	古墳時代中期	墳丘 葺石 周溝 円筒埴輪列 器財埴輪群	円筒埴輪 壺形埴輪 器財埴輪 ・家形 ・甲冑形 ・盾形 ・蓋形 土師器	・大正期以来の再調査 ・女狭穂塚の二重周溝の一部を確認 ・器財埴輪配列の一部を確認

図版1



①大正時代発掘調査着手以前の171号墳（南から？）



②大正時代発掘調査着手以前の171号墳（東から？）

図版2

①大正調査における墳丘南東面１段目テラス？埴輪列検出状況（南から？）

②大正調査における墳丘北東面１段目テラス？埴輪列検出状況（東から？）

図版3

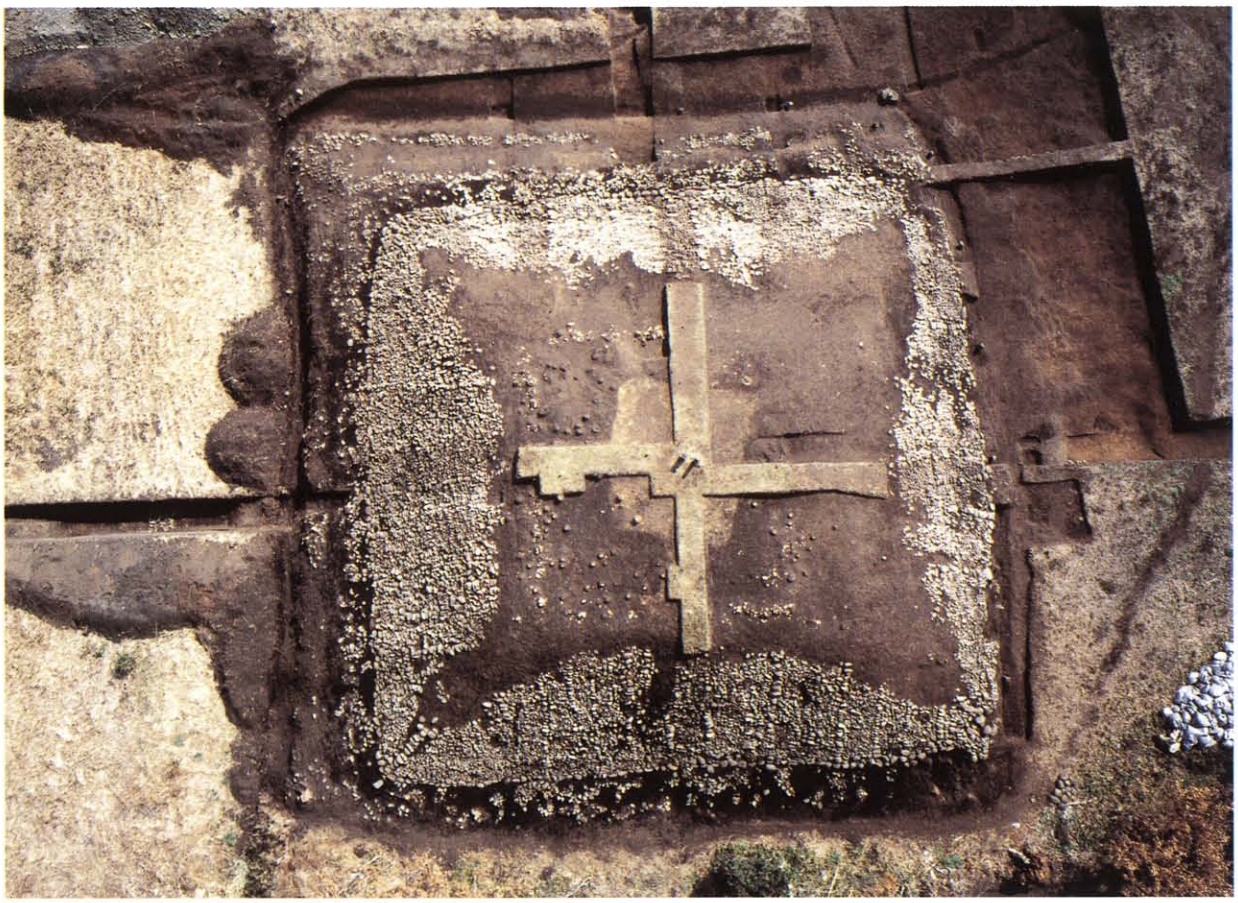
①大正調査における墳頂平坦面北コーナー付近？埴輪列検出状況（北東から？）

②大正調査における墳頂平坦面北西側埴輪列検出状況（西から？）

図版4

①大正調査における墳頂平坦面家形埴輪基底部？検出状況（南から？）

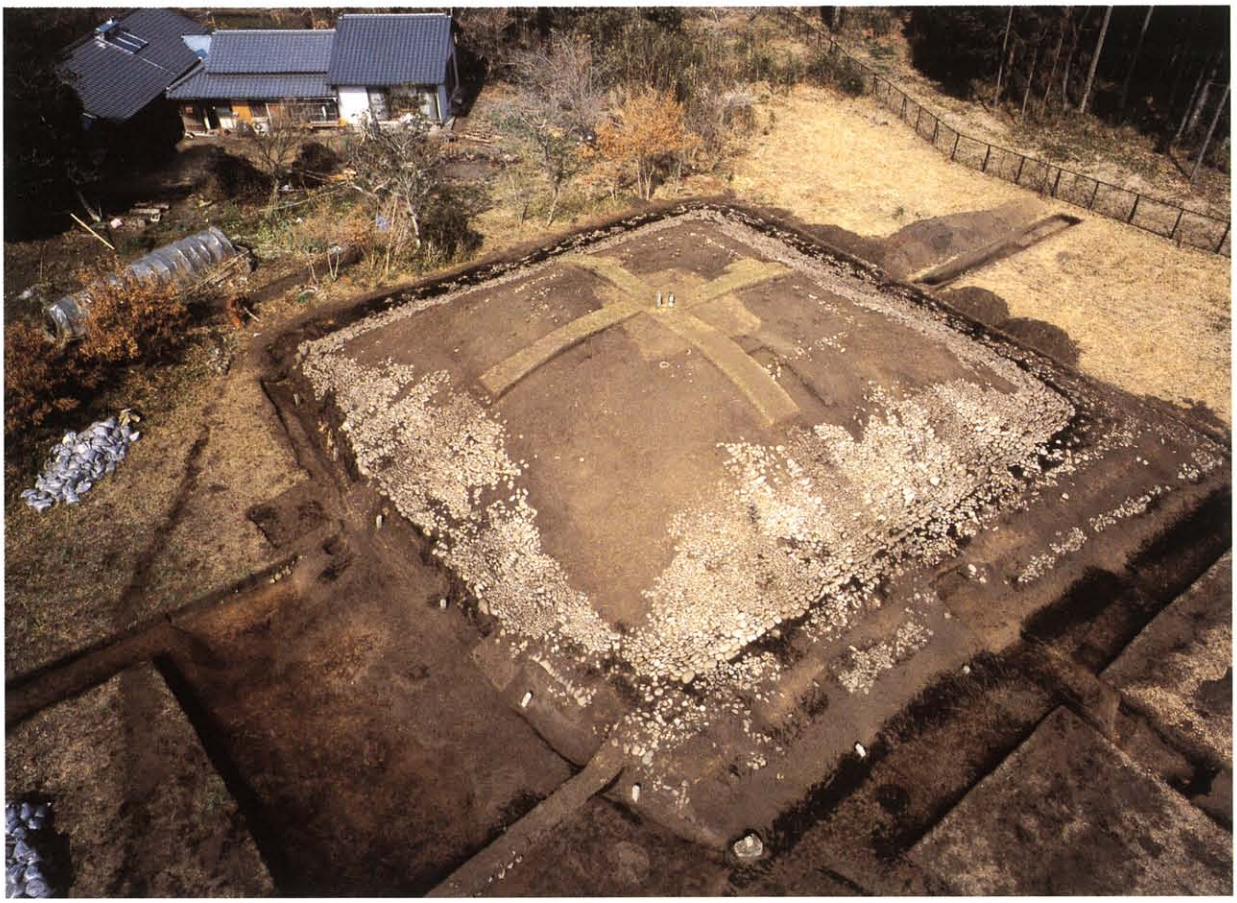
②調査区（平成11年度）遠景（南西上空から）



①171号墳墳丘検出状況（上空から）

②墳丘周辺調査区遠景（南上空から）

図版6



①墳丘検出状況近影（南から）

②墳丘検出状況近影（北から）

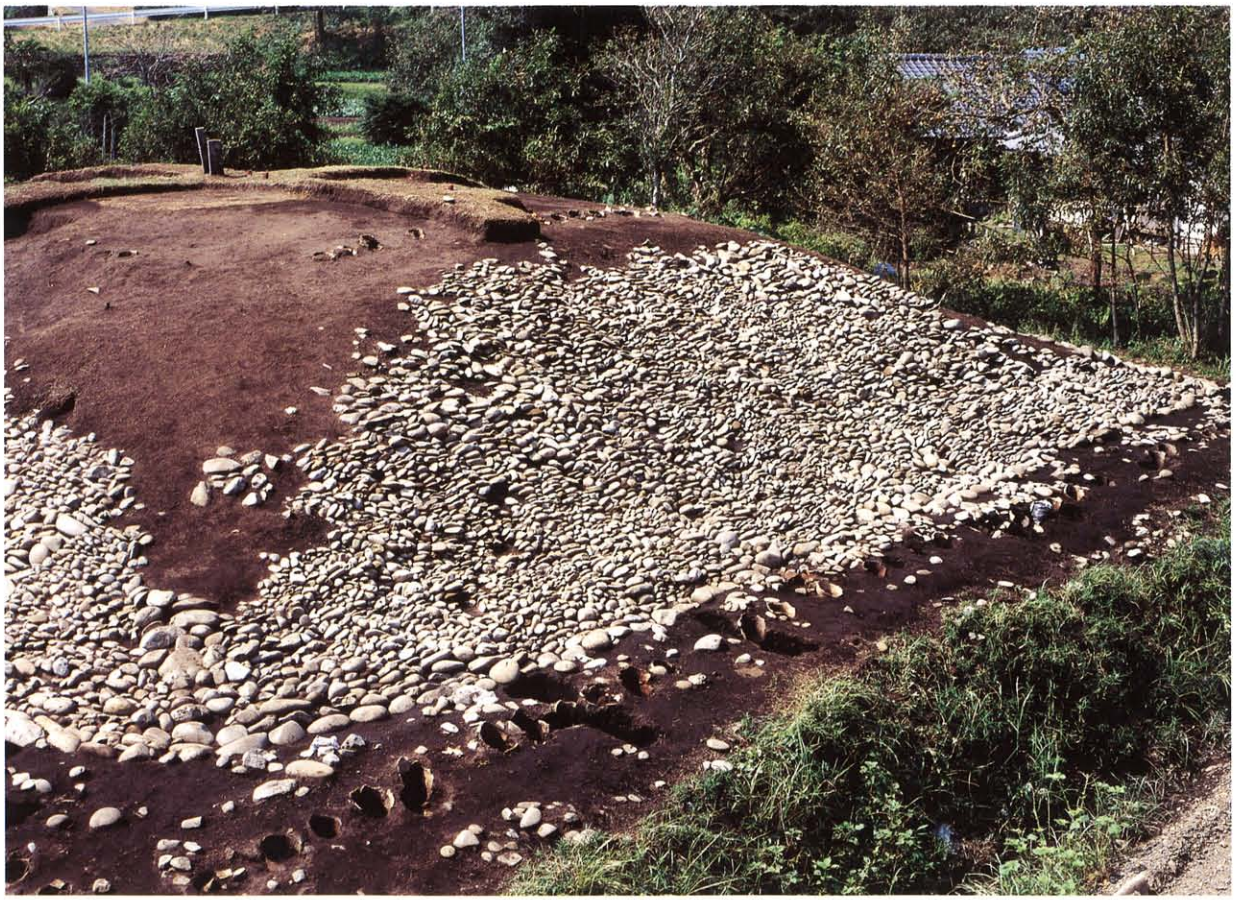
図版7

①墳丘南西・南東面における葺石検出状況（南から）

②墳丘南東面における葺石検出状況（南から）

図版8

①墳丘南東面における葺石検出状況（東コーナー方向から）



②墳丘北東面における葺石検出状況（東コーナー方向から）

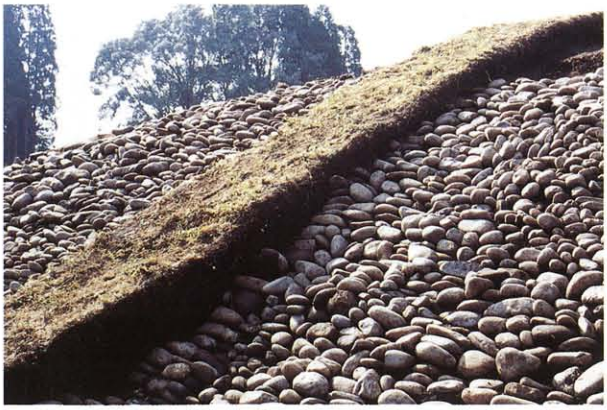
図版9

①墳丘北西面における葺石検出状況（北コーナー方向から）

②墳丘南西側周溝検出状況（平成11年度・南から）

図版10

①墳丘南西側１段目西半部葺石検出状況（南西から）



②墳丘北東側主軸付近２段目葺石検出状況（北から）

③墳丘南西側周溝検出状況（西コーナー方向から）

④墳丘南西側周溝検出状況（平成11年度・南コーナー方向から）

⑤墳丘南西側１段目西半部主軸付近葺石検出状況近影（上から）

⑥墳丘南西側周溝検出状況（南コーナー方向から）

⑦墳丘南西側１段目西半部主軸付近葺石検出状況近影（南西から）

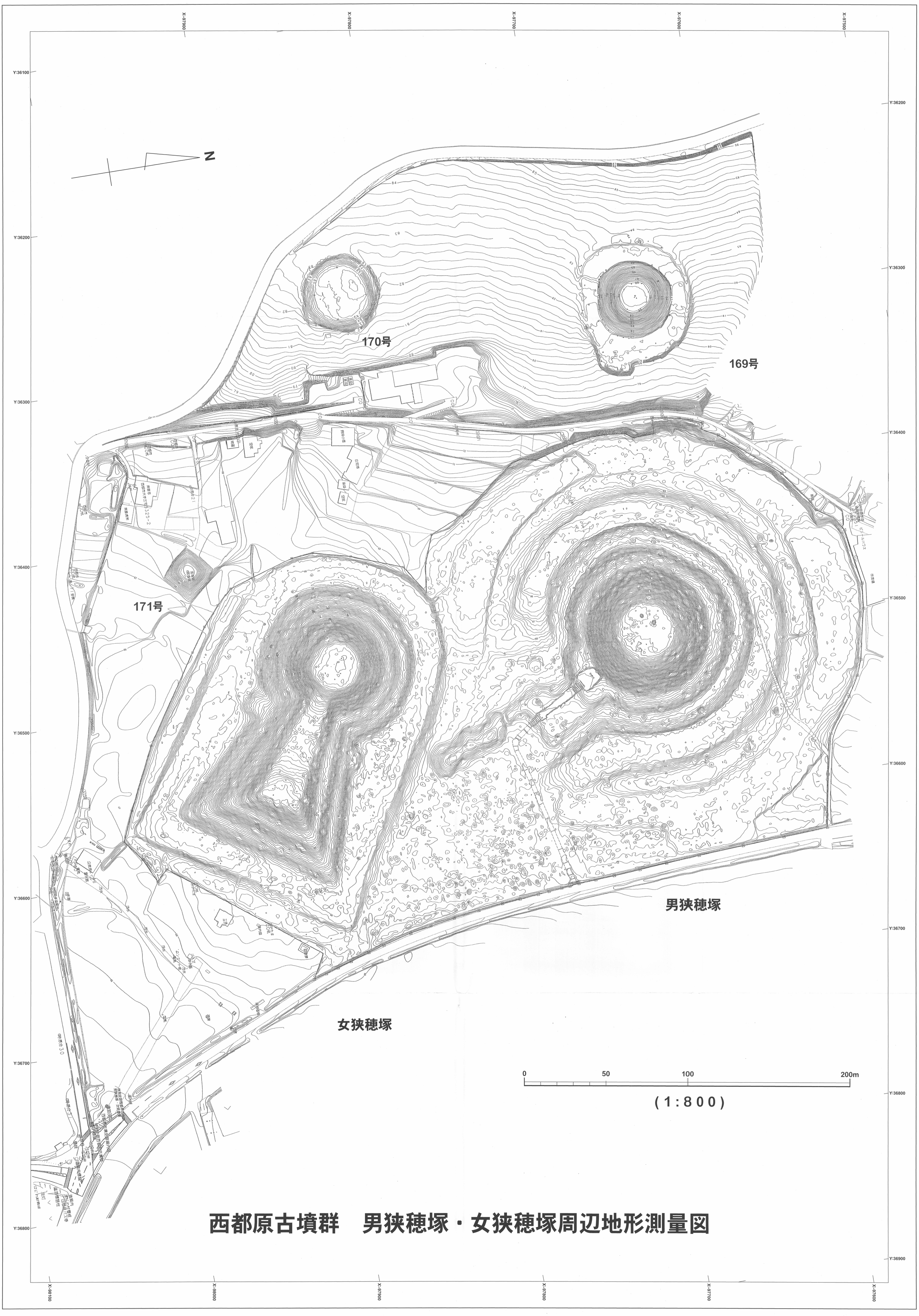
⑧墳丘南コーナー付近周溝検出状況（西から）

特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書 第４集

西都原171号墳

（第１分冊）

発行年月日　平成15年３月31日
発　　行　宮崎県教育委員会
編　　集　宮崎県教育庁文化課
宮崎市橘通東１－９－10
電　話 0985－26－7251
印　　刷　田中印刷有限会社
宮崎市大橋３丁目110番地
電　話 0985－28－4724
FAX 0985－20－9285



西都原古墳群　男狭穂塚・女狭穂塚周辺地形測量図